

広田遺跡IV区

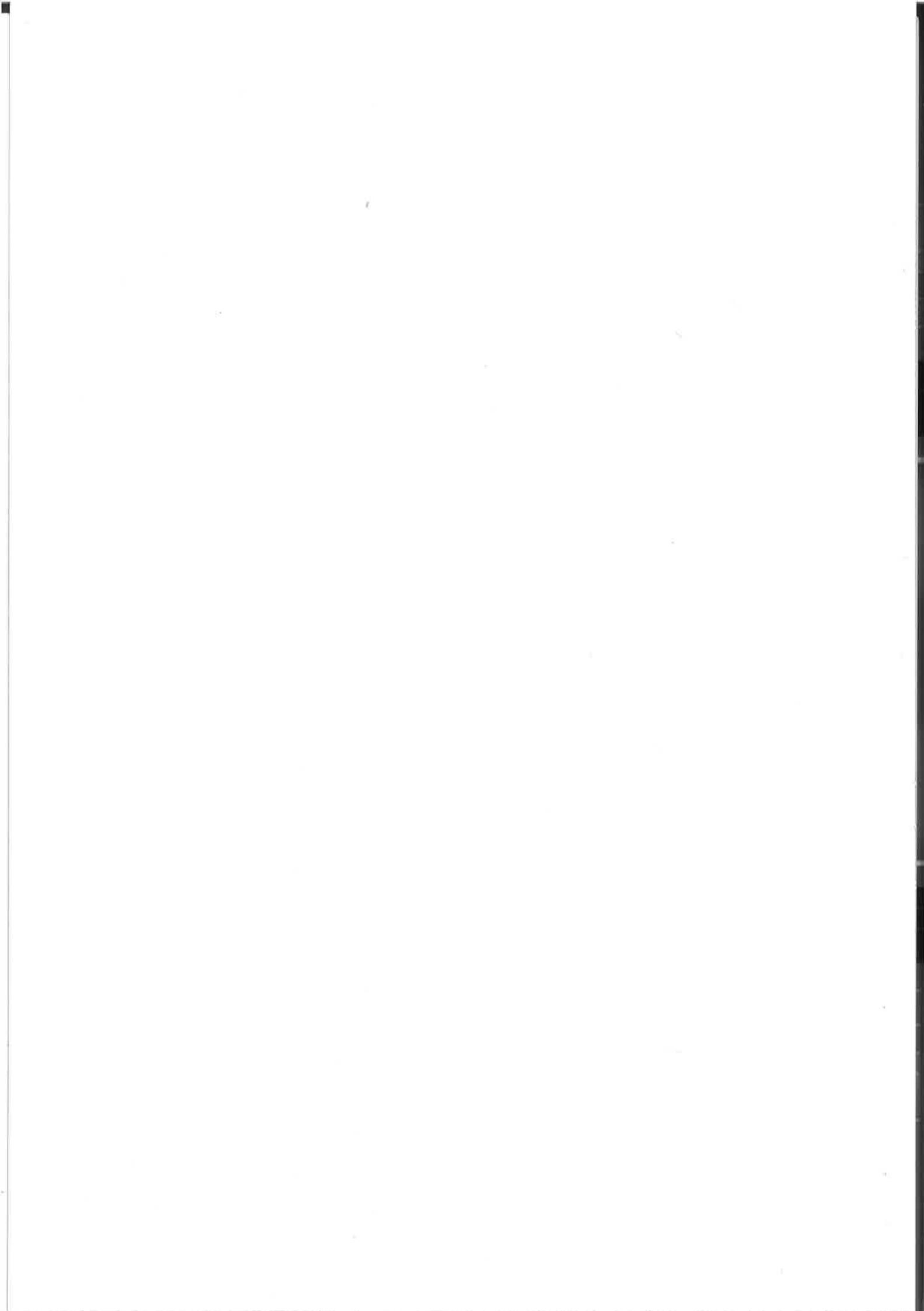
——弥生時代・甕棺墓群の調査——

二丈町文化財調査報告書

第 33 集

2005

二丈町教育委員会



広田遺跡IV区

——弥生時代・甕棺墓群の調査——

二丈町文化財調査報告書

第 33 集

2005

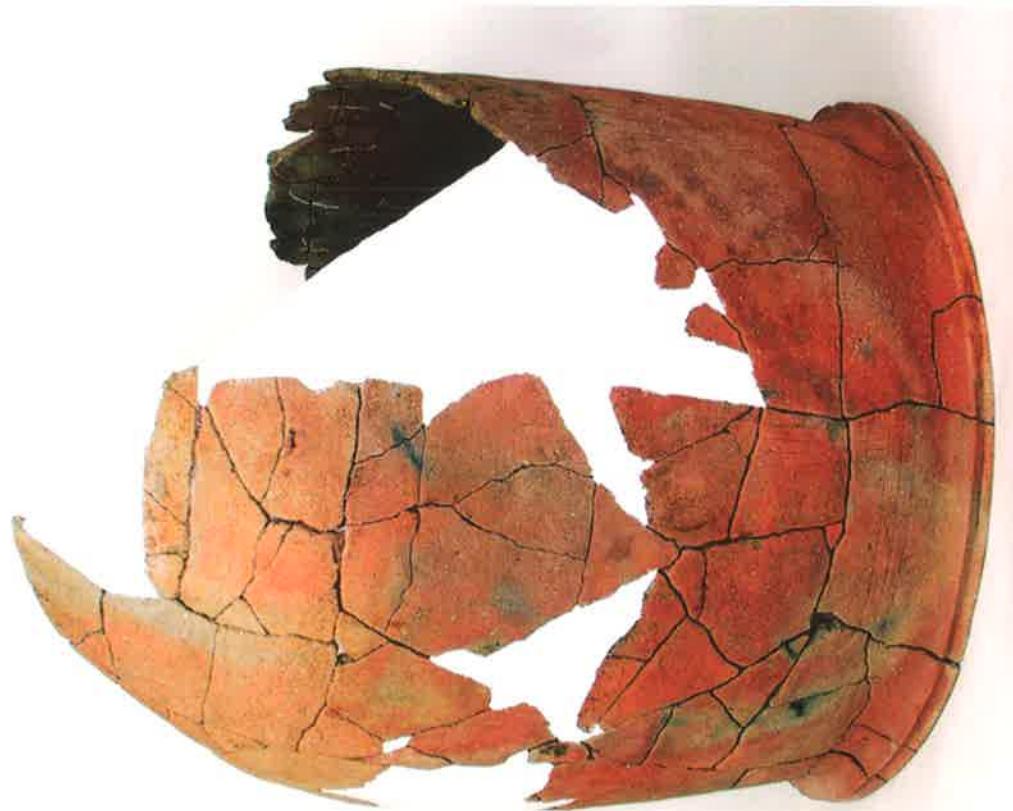
二丈町教育委員会

巻頭図版 1



広田遺跡全景空中写真（北東より）

卷頭図版 2



5号壺棺



7号壺棺



7号甕棺上甕一口縁部上面範描文・1



7号甕棺上甕一口縁部上面範描文・2

序

この報告書は、二丈町教育委員会が農業関連施設の建設に関連して緊急調査いたしました広田遺跡IV区の発掘調査の記録の一部であります。当町教育委員会発行の文化財調査報告書も、本報告書をもって第33集を数えるに至りました。第1集の『竹戸遺跡』、第2集の『曲り田遺跡—第2次調査』につきましては、町教育委員会が事業主体ではありながら実際には県教育委員会の調査に依るものでしたが、平成元年以降の発掘調査につきましては町独自に文化財担当職員を採用し、激増する開発に対応して参りました。平成3年度に一人、平成7年度にさらに一人の職員を増員し、ピーク時には3人の文化財担当職員を抱えるに至りました。長期化する不景気による開発事業の減少、行政改革による合理化などの理由により、来年度からはその数を減じて文化財行政に臨む運びとはなりましたが、今後とも、その質を低下させることなく邁進して参る所存であります。最後になりましたが、本書が考古学研究の基礎資料となり、文化財の保護と活用に広く利用されることを願いますとともに、発掘調査作業においてご協力を給わりました、地権者である近松牛舎の皆様に御礼申し上げます。

平成17年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 藤田孝治

例　　言

1. 本書は二丈町教育委員会が調査主体なり、平成15年度において国庫補助を受けて実施した二丈町大字吉井字広田に所在した広田遺跡IV区の調査報告書である。
2. 発掘調査は二丈町教育委員会　主査　村上　敦　が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、村上、河野牧子（福岡大学大学院生）が行なった。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は村上が行なった。
5. 本書に掲載した遺構、遺物の写真撮影は村上が行なった。
6. 本書に掲載した空中写真については有限会社 空中写真企画に委託した。
7. 本書に用いた方位は全て座標北である。
8. 本書の執筆編集は村上が行なった。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査期間	1
3. 調査体制	1
4. 遺跡周辺の歴史的環境	4
第2章 調査の概要	7
1. はじめに	7
2. 蓋棺墓群	7
3. その他の遺構と遺物	24
第3章 おわりに	28
1. 蓋棺の型式について	28
2. 蓋棺墓の群構成について	28

挿図目次

第1図 二丈町位置図（縮尺1/200,000）	2
第2図 町内主要遺跡分布図（縮尺1/50,000）	3
第3図 広田遺跡周辺地形図（縮尺1/2,500）	5
第4図 広田遺跡遺構配置図（縮尺1/200）	6
第5図 調査区南部・蓋棺墓配置図（縮尺1/80）	7
第6図 1号蓋棺墓実測図（縮尺1/20）	8
第7図 1号蓋棺実測図（縮尺1/8）	8
第8図 2号蓋棺墓実測図（縮尺1/20）	9
第9図 2号蓋棺実測図（縮尺1/8）	9
第10図 2号蓋棺墓棺内出土遺物実測図（縮尺2/3）	9
第11図 3号蓋棺墓実測図（縮尺1/20）	10
第12図 3号蓋棺実測図（縮尺1/8）	10
第13図 3号蓋棺墓棺内出土遺物実測図（縮尺2/3）	10
第14図 4号蓋棺墓実測図（縮尺1/20）	11
第15図 4号蓋棺実測図（縮尺1/8）	11
第16図 5号蓋棺墓棺内出土遺物実測図・1（縮尺1/3）	11
第17図 5号蓋棺墓実測図（縮尺1/20）	12
第18図 5号蓋棺墓棺内出土遺物実測図・2（縮尺2/3）	12

第19図	5号甕棺実測図（縮尺1/8）	12
第20図	6号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	13
第21図	6号甕棺実測図（縮尺1/8）	13
第22図	7号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	13
第23図	7号甕棺実測図（縮尺1/8）	14
第24図	7号甕棺墓墓壙内出土遺物・1（縮尺1/3）	14
第25図	7号甕棺墓墓壙内出土遺物・2（縮尺1/3）	14
第26図	7号甕棺墓棺内出土遺物（縮尺2/3）	14
第27図	8号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	15
第28図	8号甕棺実測図（縮尺1/8）	15
第29図	8号甕棺墓棺内出土遺物（縮尺2/3）	15
第30図	9号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	16
第31図	9号甕棺実測図（縮尺1/8）	16
第32図	10号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	16
第33図	10号甕棺実測図（縮尺1/8）	16
第34図	11号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	17
第35図	11号甕棺実測図（縮尺1/8）	17
第36図	12号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	18
第37図	12号甕棺実測図（縮尺1/8）	18
第38図	12号甕棺墓棺内出土遺物（縮尺2/3）	18
第39図	13号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	19
第40図	13号甕棺実測図（縮尺1/8）	19
第41図	14号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	20
第42図	14号甕棺実測図（縮尺1/8）	20
第43図	15号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	21
第44図	15号甕棺実測図（縮尺1/8）	21
第45図	16号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	22
第46図	16号甕棺実測図（縮尺1/8）	22
第47図	17号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	22
第48図	17号甕棺実測図（縮尺1/8）	22
第49図	1号竪穴住居跡実測図（縮尺1/40）	24
第50図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図・1（縮尺1/3）	26
第51図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図・2（縮尺2/3）	27

表 目 次

表 1	甕棺墓一覧表	23
表 2	甕棺墓出土玉類計測表	23

図 版 目 次

卷頭図版 1	広田遺跡全景空中写真（北東より）
卷頭図版 2	5号甕棺
卷頭図版 3	7号甕棺
卷頭図版 4	7号甕棺上甕一口縁部上面箋描文・1
卷頭図版 5	7号甕棺上甕一口縁部上面箋描文・2
図版 1	広田遺跡上空・空中写真（東から）
図版 2	広田遺跡IV区全景（東から）
図版 3	広田遺跡IV区全景（空中写真）
図版 4	<上段>調査区南西部甕棺墓群（空中写真） <下段>調査区東部全景（空中写真）
図版 5	<上段>1号甕棺墓（西から） <下段>2号甕棺墓（西から）
図版 6	<上段>3号甕棺墓（西から） <下段>4号甕棺墓（西から）
図版 7	<上段>5号甕棺墓（西から） <下段>5号甕棺墓（東から）
図版 8	<上段>6号甕棺墓（西から） <下段>7号甕棺墓（西から）
図版 9	<上段>8号甕棺墓（西から） <下段>9号甕棺墓（西から）
図版10	<上段>10号甕棺墓（西から） <下段>11号甕棺墓（西から）
図版11	<上段>12号甕棺墓（西から） <下段>13号甕棺墓（北西から）
図版12	<上段>14号甕棺墓（西から） <下段>15号甕棺墓（西から）

- 図版13 <上段>16号甕棺墓（北西から）
<下段>17号甕棺墓（南から）
- 図版14 <上段>1号竪穴住居跡（東から）
<下段>SX-1（西から）
- 図版15 1～4号甕棺
- 図版16 5～9号甕棺
- 図版17 10～13号甕棺
- 図版18 14～17号甕棺
- 図版19 甕棺墓内出土遺物
- 図版20 1号竪穴住居跡出土土器・石器

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

農業用施設の建設の為、二丈町役場産業振興課より二丈町大字吉井字広田2866番地の1地内の埋蔵文化財の有無について照会を受けたのは平成15年の3月であった。二丈町教育委員会では地図上で位置を確認し、埋蔵文化財の存在する可能性が極めて高い場所であったため、早急に事業者と調整を図る必要性がある旨を伝えた。諸手続きの後、平成15年5月、重機による試掘・確認調査を行い、弥生時代前期を中心とした甕棺墓群を確認した。その後一旦埋め戻し、諸調整を図った後、発掘調査を開始するに至った。

2. 調査期間

平成15年6月2日～平成15年9月30日

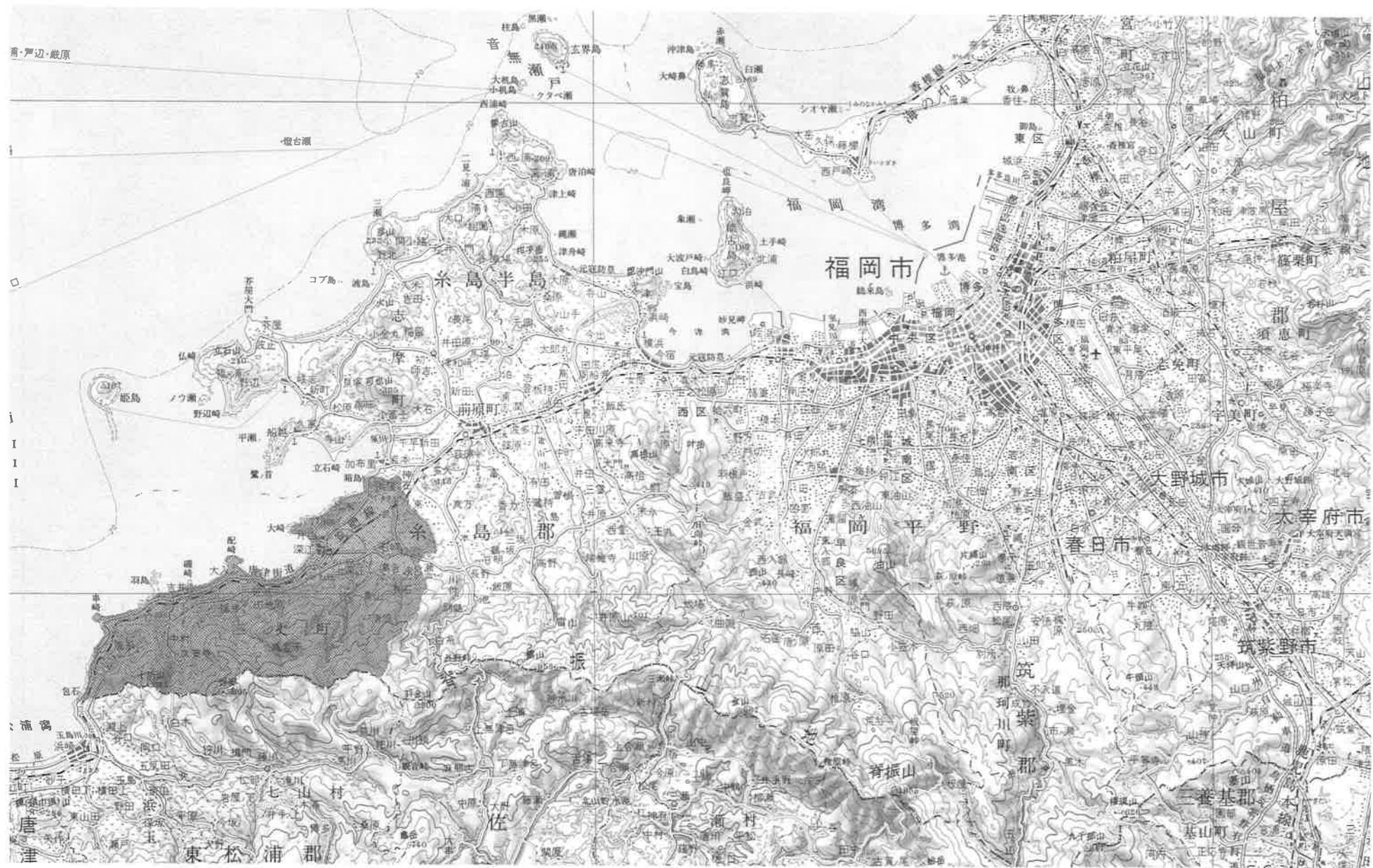
3. 調査体制

発掘調査

調査主体	二丈町教育委員会	教 育 長	藤田孝治
調査総括		教 育 課 長	青木槙夫
		教育課長補佐	大庭一成
		"	川島節夫
		社会教育係長	清水絹枝
調査担当		主 査	村上 敦
調査作業		阿部恵美子、阿部庄吾、草場 伝、宮崎千鶴、 山崎末治、河野牧子（福岡大学大学院生）	

報告書作成

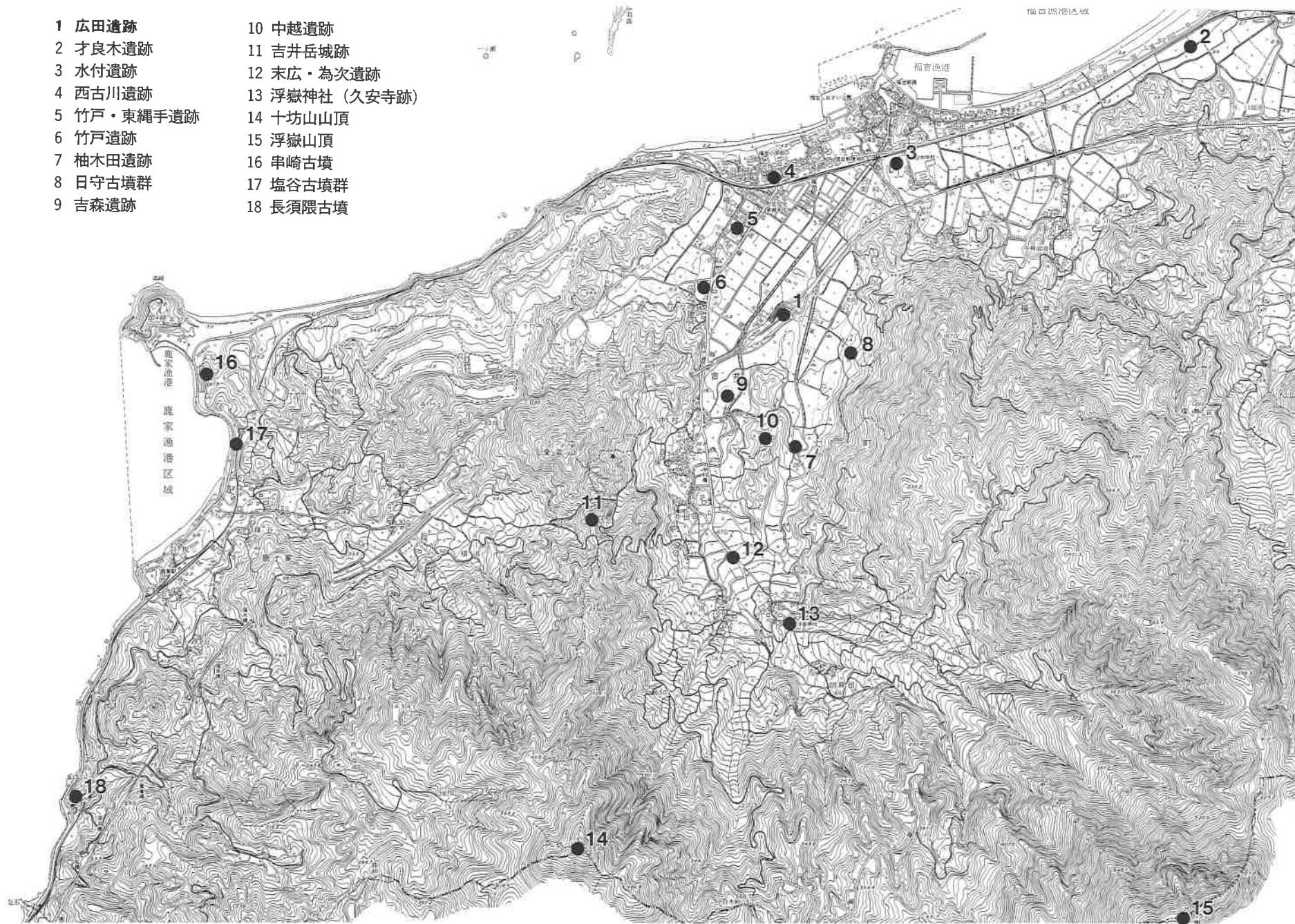
調査主体	二丈町教育委員会	教 育 長	藤田孝治
調査総括		教 育 課 長	大庭一成
		教育課長補佐	川島節夫
		"	松崎治幸
		文 化 係 長	古川秀幸
調査担当		主 査	村上 敦
整理作業		木下文子、高木美枝	



第1図 二丈町位置図（縮尺1/200,000）

- 1 広田遺跡
- 2 才良木遺跡
- 3 水付遺跡
- 4 西古川遺跡
- 5 竹戸・東縄手遺跡
- 6 竹戸遺跡
- 7 柚木田遺跡
- 8 日守古墳群
- 9 吉森遺跡

- 10 中越遺跡
- 11 吉井岳城跡
- 12 末広・為次遺跡
- 13 浮嶽神社（久安寺跡）
- 14 十坊山山頂
- 15 浮嶽山山頂
- 16 串崎古墳
- 17 塩谷古墳群
- 18 長須限古墳



第2図 町内主要遺跡分布図（縮尺1/50,000）

4. 遺跡周辺の歴史的環境

広田遺跡は二丈町大字吉井字広田に所在する。

北に浮嶽（標高805m）、十坊山（標高535m）といった背振山地の山々を背負い、東西はそれから海に向かって派生する山塊に挟まれた谷間には、福吉川と東川の2本の河川が流れ、その間には幅200m程度の舌状丘陵が形成されている。この丘陵とその周辺部からは、押型文土器や局部磨製石鏃などの縄文時代早期の遺物の出土が散発的にみられるので、明確な遺構としては確認できていないものの近辺には集落が存在していたものであろう。

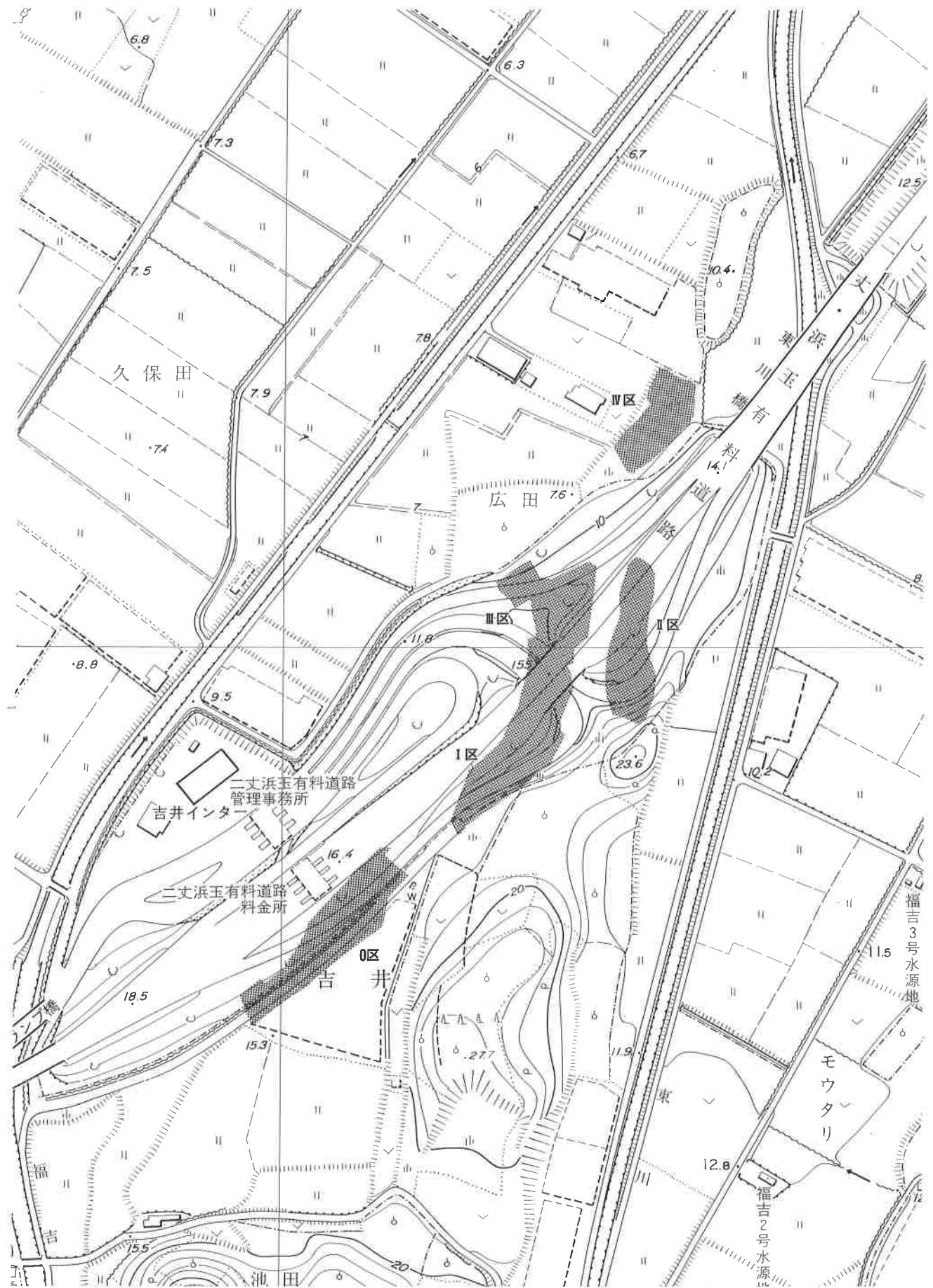
広田遺跡はこの舌状丘陵の先端部に位置し、海のある北側には沖積地の水田地帯が広がる。この遺跡は、二丈・浜玉有料道路の建設に先立ち、昭和53年度に福岡県教育委員会により数次の発掘調査が、0～III区の区域に分けられ行われている。

0区は、調査面積1,870m²。昭和53年（1978）10月1日～12月2日、昭和54年3月1日～3月27日の2次にわたって発掘調査が行われている。調査担当者は小池史哲（現・福岡県教育庁文化財保護課調査第一係長）である。この区域からは縄文時代の大溝、埋甕、奈良時代の土壙、歴史時代の掘立柱建物跡6棟などが検出されている。縄文時代の大溝は人為的なものではなく自然に依るものと考えられているが、その埋土には多量の縄文土器や石器などが含まれていた。小池によって設定された縄文時代晩期の土器型式「広田式」は、この大溝から出土した土器群の分析に依るものである。またここからは土偶、桜ヶ丘型石製品などの希少な遺物も出土しており、小池は、打製石斧やすり石の多用、石刀、硬玉製管玉、埋葬遺構としての埋甕の存在などを東日本的、或いは「東日本の縄文中期農耕論で注目された日本列島の半栽培的農耕文化の要素」と考える。さらに小池は、「定型的な打製石斧や石鍬の刃部が顕著に磨耗すること、収穫具とみられる安山岩製の打製石包丁形剥片石器や打製石鎌などが存在することから、半栽培段階よりも進歩した初期農耕を想像させる。」としている。また大陸系の柱状片刃石斧片の出土から、本格的でなくとも朝鮮半島から穀類農耕文化が伝わった可能性が高く、日本列島系縄文文化と大陸系農耕文化との接觸点であるとの評価を与えていている。

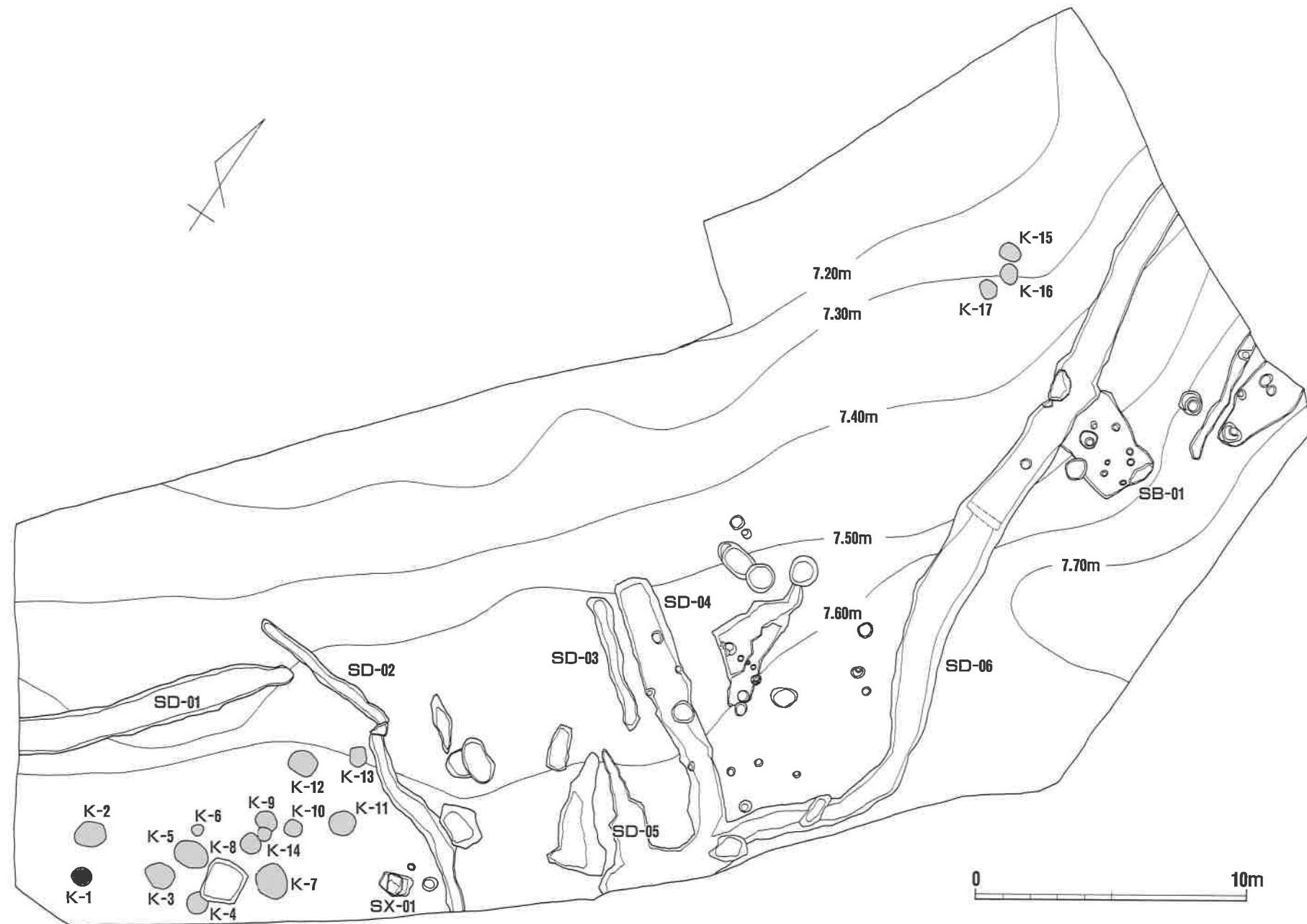
I～III区は、調査面積4,000m²、調査期間は昭和53年7月4日～10月4日、調査担当者は中間研志（現・福岡県教育庁文化財保護課調査第二係長）である。I区とIII区は連続した区域であり、弥生時代中期末～後期初頭にかけての貯蔵穴、土壙墓、古墳時代後期の横穴式石室、歴史時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出されている。また、竪穴住居跡の埋土からは「染山」と墨書きされた須恵器が出土している。II区からは弥生時代中期の甕棺墓（転用棺）、近世墓、近世の一字一石経塚が検出されている。

また、広田遺跡の西北400mには弥生時代前期集落の竹戸東繩手遺跡が所在する。今回報告する広田遺跡IV区はこの遺跡とほぼ同時代の遺跡であり、周辺部には広田遺跡0区と広田遺跡IV区との時期差を埋める弥生時代早期～前期前半にかけての遺跡が存在するものであろう。

さらに、広田遺跡の北500mの字「西古川」からは細形銅劍・細形銅矛が出土しており、それ以外にも、小型の銅劍、異式の劍がそれぞれ別の場所から出土しているという。これらについては、中山平次郎『考古学雑誌』第15巻第4号に記述があるが、これ以外にも、大字吉井字松原からは弥生時代中期の甕棺の不時発見がある。



第3図 広田遺跡周辺地形図（縮尺1/2,500）



第4図 広田遺跡遺構配置図（縮尺1/200）

第2章 調査の概要

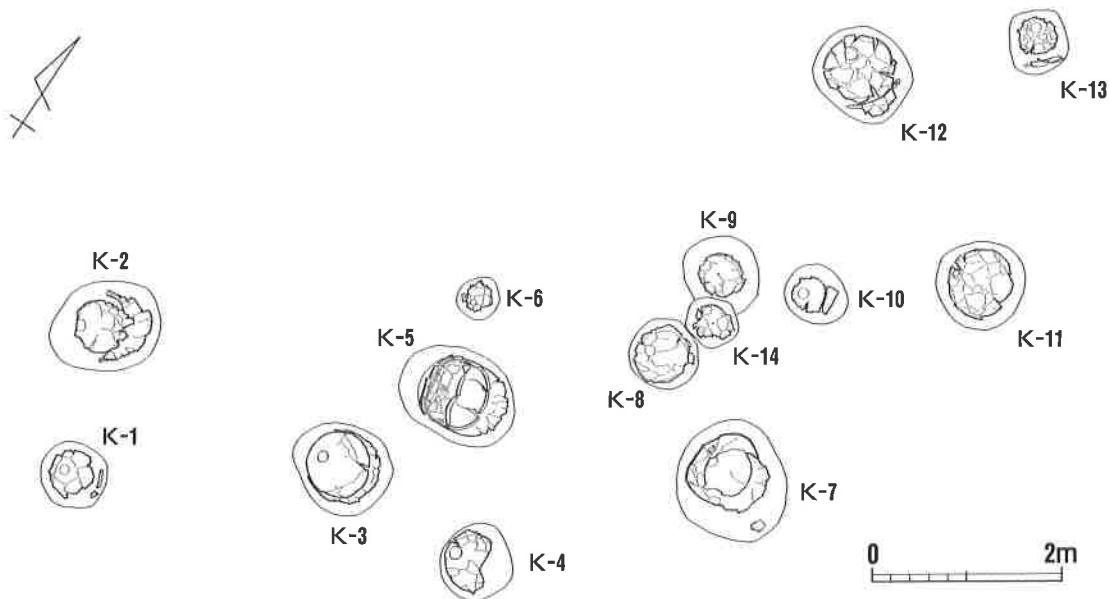
1. はじめに—調査の経過

今回報告する広田遺跡IV区は、福岡県教育委員会が調査を行ったI～III区の北方50mに位置する。二丈・浜玉有料道路の敷地に接しており、舌状丘陵の裾部にあたる。調査開始直前は農地として利用されていたために比較的平坦に整地されていたが、かつては北西側に緩やかに下った斜面であったらしい。検出された遺構は、甕棺墓、竪穴住居跡、溝状遺構などである。

調査を行った平成15年の夏は、一般的には冷夏として捉えられていたようであるが、それはあくまで平均的な数字であり、最高気温が36°Cを越えた日も珍しくなかった。また、調査区と有料道路との間には農業用の用水路が通っており、遺構面の高さがこの水路の底よりも低かったため常に漏水があり、ひとたび雨が降ると数時間でプールと化し、水中ポンプでの水抜作業に丸一日を要するといった状態のため、調査は遅々として進まない状況であった。これらの状況により、調査の終了は大幅に遅延してしまった。

2. 甕棺墓群

計17基の甕棺墓を検出し調査した。削平による損傷が大きく、上甕については全ての甕棺墓が損傷を受けており、下甕についても削平による影響を受けていないものは僅かに2基のみであった。甕棺墓群は調査区の南部と北部に明確に二つの群に分かれているが、両者には時期的な差異があり、南部の群は弥生時代前期後半～中期初頭、北部は弥生時代中期中葉の甕棺墓群である。甕棺墓の主軸は概ね東方向を向いているものが多い。



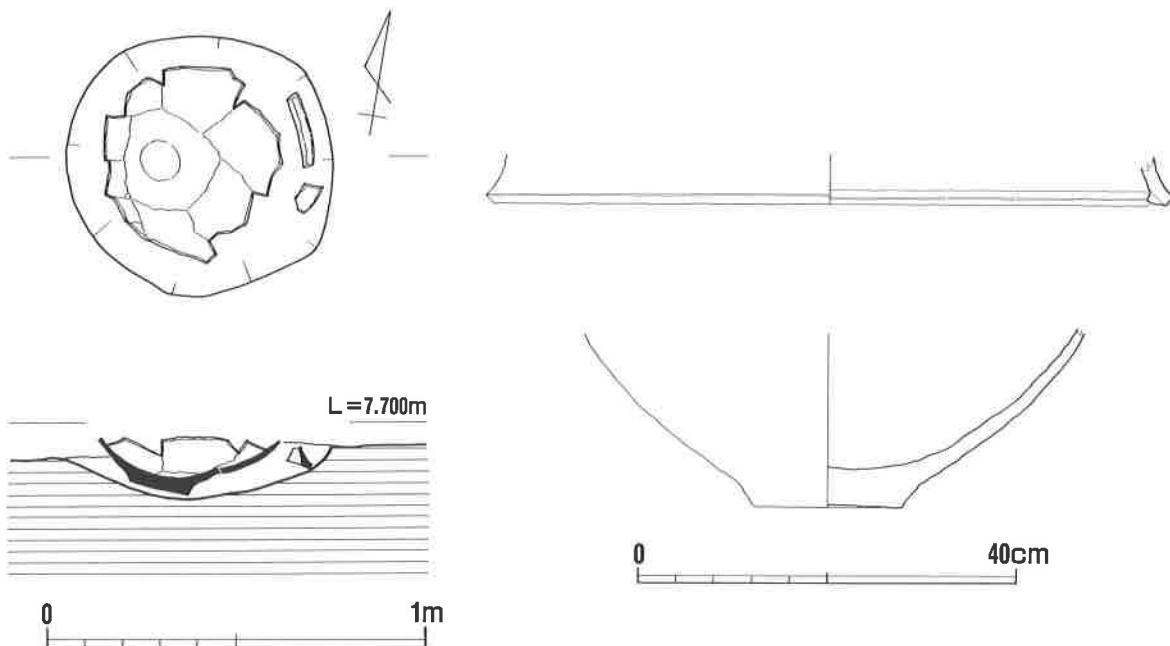
第5図 調査区南部・甕棺墓配置図（縮尺1/80）

1号甕棺墓

調査区の南隅部、2号甕棺墓に近接して位置する。主軸方位はN-81°-E、埋置角度は78°前後であろう。上甕の口縁部の一部以外と下甕の大半を欠損する。

上甕 大形の専用棺系土器である。口縁部径72.6cmに復元される。器表の色調は橙褐色を呈し、胎土には1～3mm程度の小砂粒を多く含む。

下甕 底部付近しか残存していないが、大形甕であろう。底部径は15.8cmを測る。器表の色調は白褐色を呈し、胎土には1～5mm程度の砂粒を多く含む。



第6図 1号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

第7図 1号甕棺実測図（縮尺1/8）

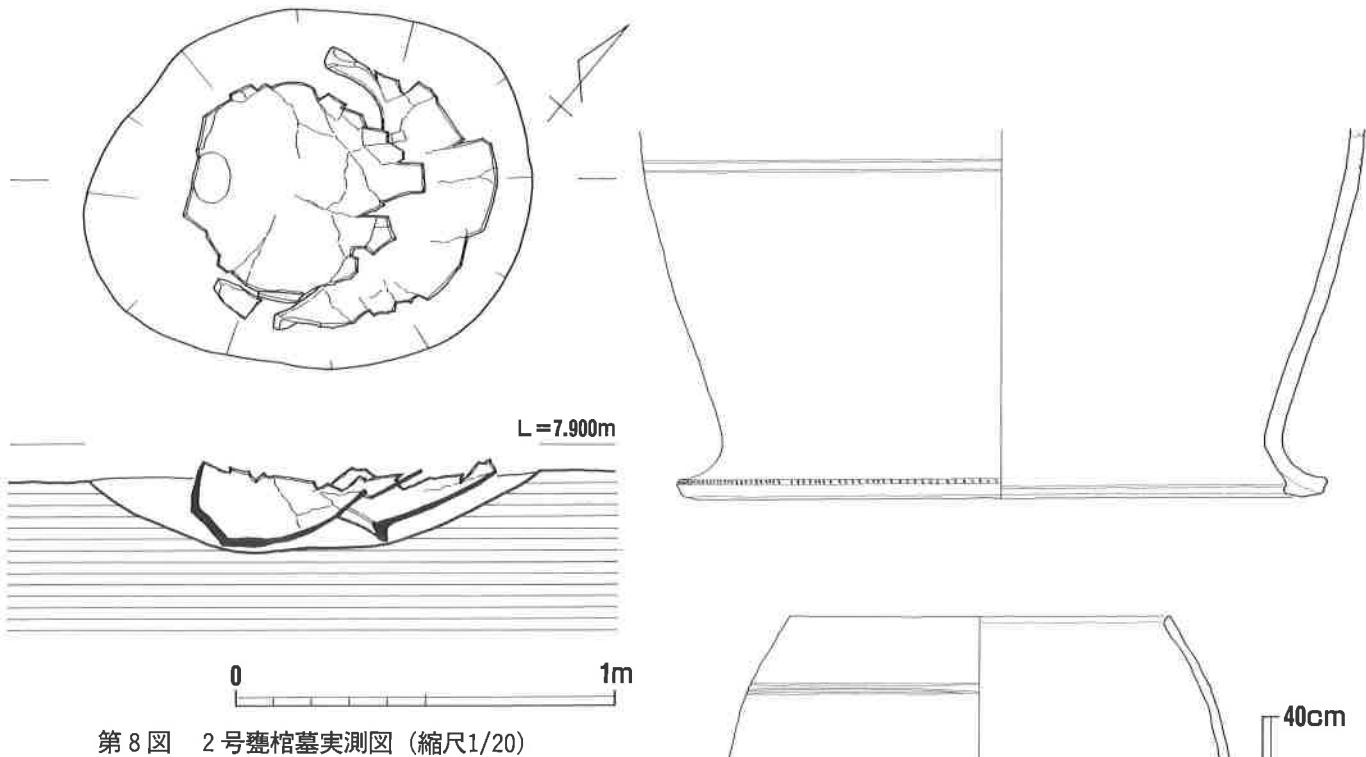
2号甕棺墓

調査区の南隅部、1号甕棺墓の北西約0.8mに位置する。主軸方位はN-51°-E、下甕の埋置角度は53°である。上甕、下甕とともに欠損部分が大きい。下甕は口縁部を打ち欠いた大形壺を用い、大形甕を用いた上甕により胴部の半分近くまで深く覆われる。

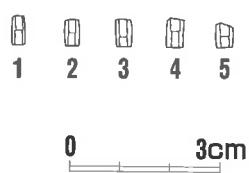
上甕 大形の専用棺系土器である。胴部を巡る2条の沈線付近から下位を欠損する。口縁部径68.6cm、胴部最大径76.0cmを測る。口縁部内側には粘土帯を張り、外側の下端には刻目が施される。色調は内外面ともに明橙褐色を呈し、胎土には数mm程度の砂粒を多量に含む。

下甕 大形の専用棺系土器である。口縁部を打ち欠かれており、残存器高50.6cm、胴部最大径53.0cm、底部径11.8cmを測る。胴部は卵形状に丸みをもち、胴部上位の2～3条の沈線付近からは大きく窄まる様相を呈する。胴部下位には焼成後の外側からの打突によるタテ1.5cm、ヨコ2cmの穿孔がある。色調は淡橙白褐色を呈し、外面にはタテ40×ヨコ30cmの黒斑がある。また同じく外面の胴部最大径位付近には径2cm程度の赤色顔料の痕跡が認められ、全面に塗布されていた可能性もある。胎土には2mm以下の砂粒を多く含む。胴部下位には焼成後の穿孔がある。

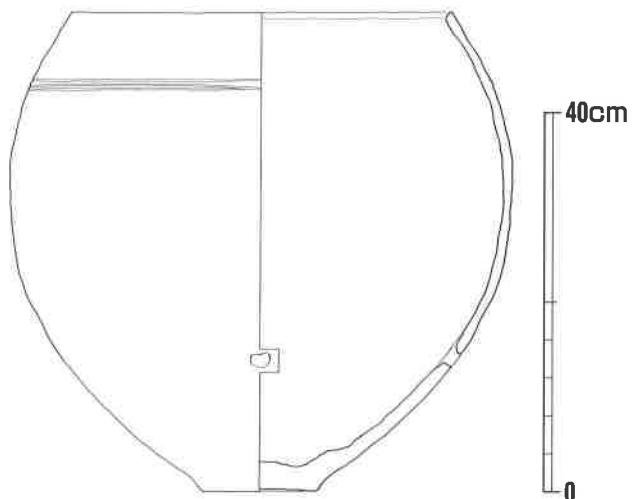
出土遺物 埋土の土壤洗浄により、棺内より管玉 5 点が出土した。計測値等は表 2 に示す。



第8図 2号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



第10図 2号甕棺墓棺内出土遺物実測図（縮尺2/3）

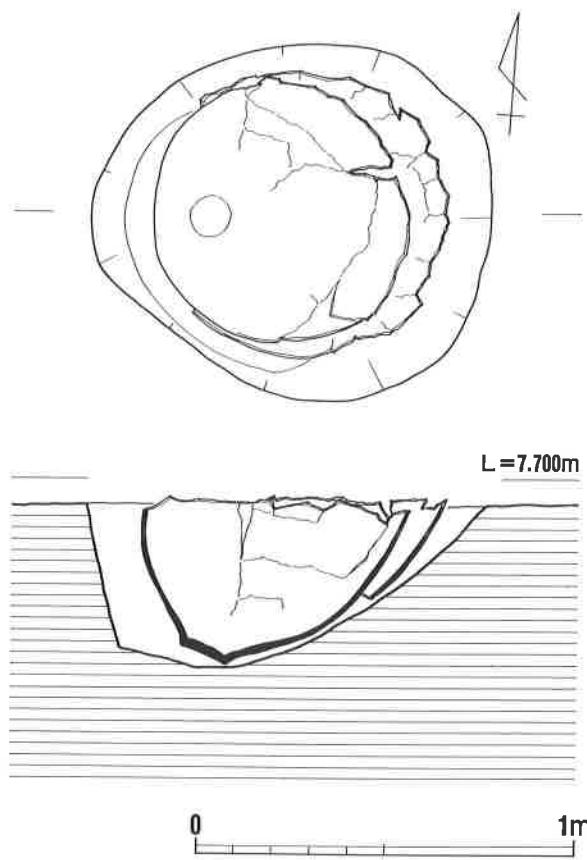


第9図 2号甕棺実測図（縮尺1/8）

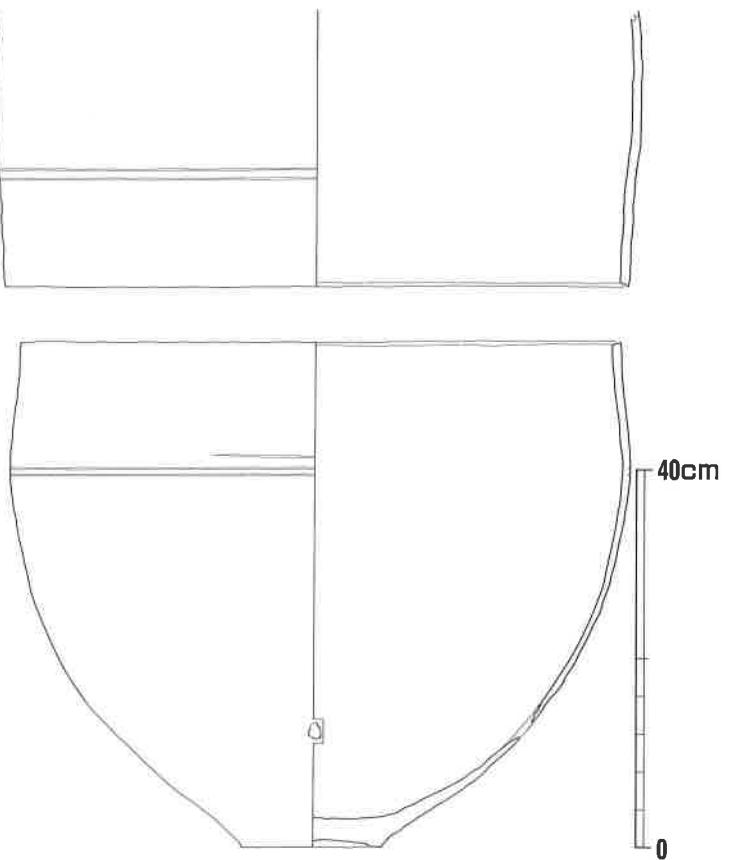
3号甕棺墓

調査区の南隅部、2号甕棺墓の東2m、5号甕棺墓と4号甕棺墓に近接する。主軸方位はN-86°-Eを示し、埋置角度は66°を測る。下甕の上半部より上位を削平により欠損する。下甕は大形の甕を用いるが欠損により口縁部の打ち欠きの有無は不明であり、口縁部を打ち欠いた大形の専用棺系土器を用いた上甕で下甕の胴部最大径位までを覆う。

上甕 大形の専用棺系土器である。口縁部は打ち欠かれ、胴部の下位は削平により欠損する。胴部最大径は68.2cmを測り、そのやや上位には2条の沈線が巡る。色調は淡橙白褐色を呈し、胎土には1mm以下の小砂粒を多く含む。



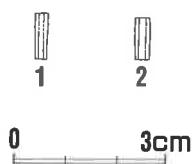
第11図 3号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



第12図 3号甕棺実測図（縮尺1/8）

下甕 大形の専用棺系土器である。欠損により頸部打ち欠きの有無は不明、残存高53.4cm、胴部最大径65.6cm、底径14.8cmを測る。胴部下位には穿孔が施される。器表の色調は淡橙褐色を呈し、胎土には1～数mm程度の砂粒を多量に含む。また、1～3mm程度の赤褐色の粒を多く含むが成分は不明である。

出土遺物 埋土の土壤洗浄により棺内より2点の管玉が出土した。計測値等は表2に示す。

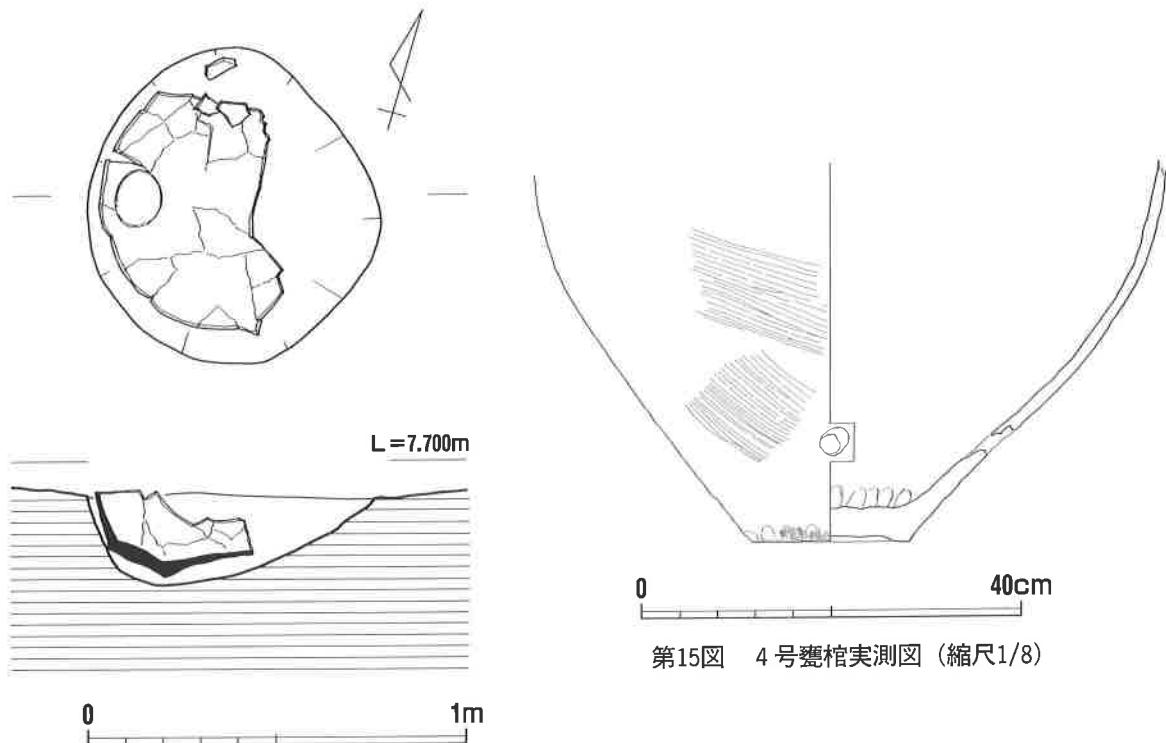


第13図 3号甕棺墓棺内出土遺物実測図（縮尺2/3）

4号甕棺墓

調査区の南隅部、3号甕棺墓の東0.9mに位置する。削平並びに隣接する攪乱坑により棺体の多くを欠損し、上甕の有無は不明である。主軸方位はN-74°-Eを示し、埋置角度は63°を測る。

下甕 大形の専用棺系土器である。胴部最大径位付近から上部を欠損する。胴部最大径は66.6cmに復元でき、底径は16.4cmを測る。器表の色調は橙褐色、或いは白灰褐色を呈し、胎土には数mm程度の砂粒を非常に多量に含む。外面は特に器表の剥落が著しく、化粧土が施されていた可能性がある。また、外面には赤色顔料が塗布されていた痕跡が認められる。胴部下位には穿孔が施される。



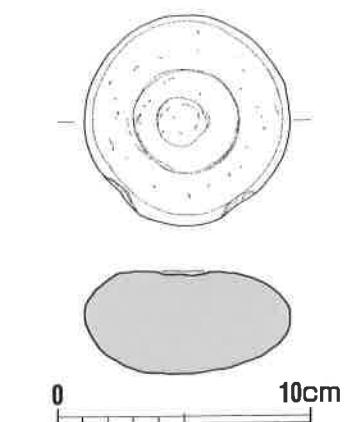
第14図 4号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

第15図 4号甕棺実測図（縮尺1/8）

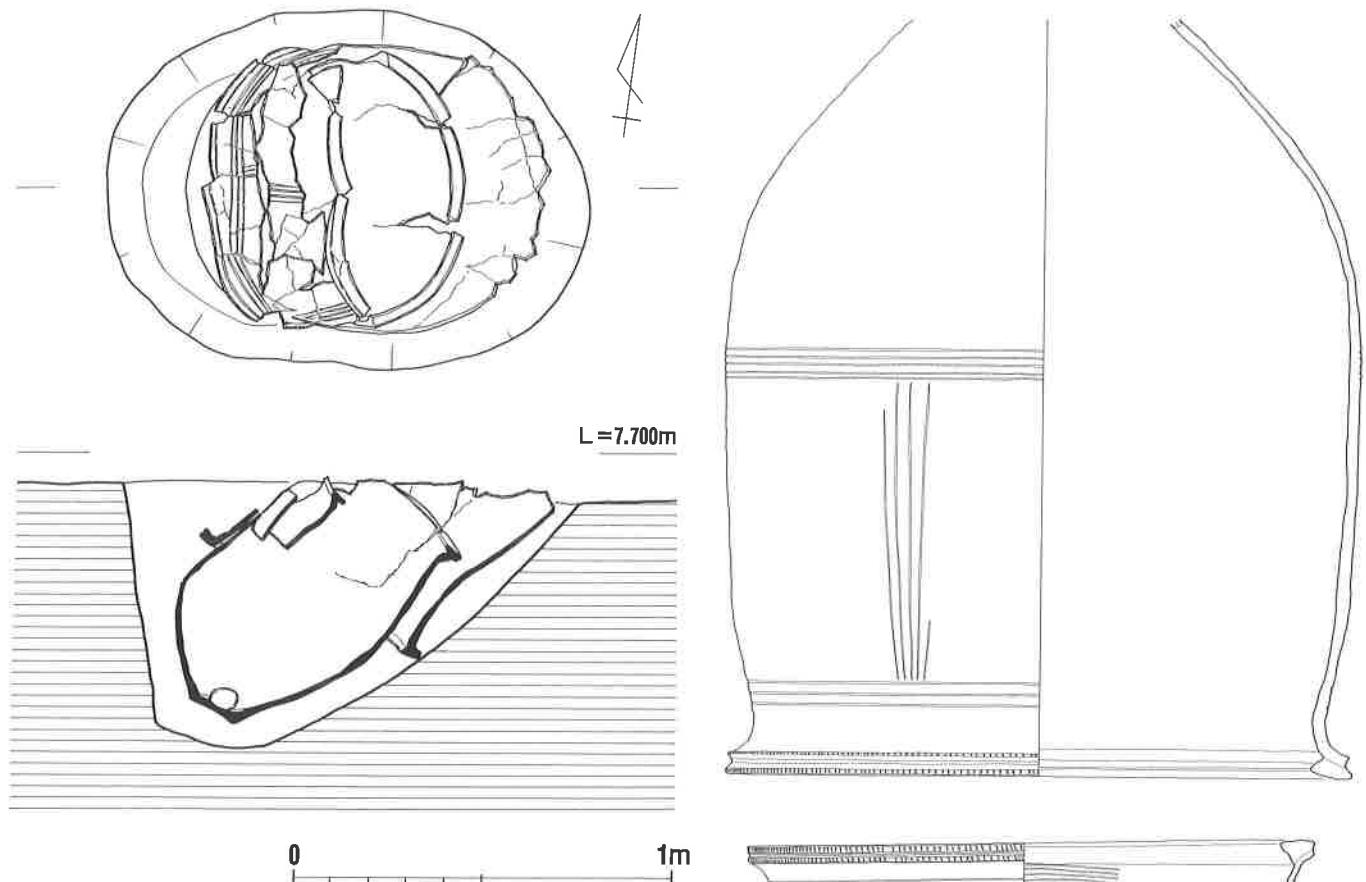
5号甕棺墓

調査区の南東部隅、3号甕棺墓の北0.4mに位置する。今回の調査の中では最も残りの良い甕棺墓であるが、上甕の下半部を欠損する。上甕、下甕とともに大形の甕形土器が用いられ、両者ともに頸部の打ち欠きは見られず、下甕の胴部最大径位付近までを上甕が覆う。主軸方位はN-83°-Eを示し、埋置角度は60°を示す。調査中の風雨・紫外線により目視できなくなってしまったが、下甕の内面全体には赤色顔料が塗布されていた。

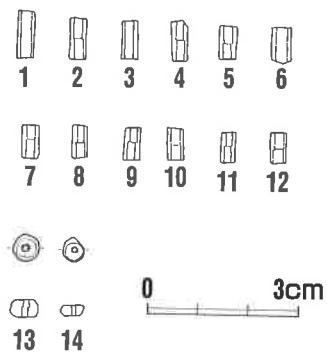
上甕 大形の専用棺系土器である。口径66.2cm、胴部最大径66.8cm、残存高80.0cmを測る。頸部付近には3条、胴部の中位には4～5条の沈線が巡り、その間には5～6条を一単位とした縦方向の沈線帯が2単位残される。本来は6単位が施されたものであろう。口縁部は内側へ粘土帯を貼り付けることにより肥厚化し、外面の上端部と下端部には刻目が施さ



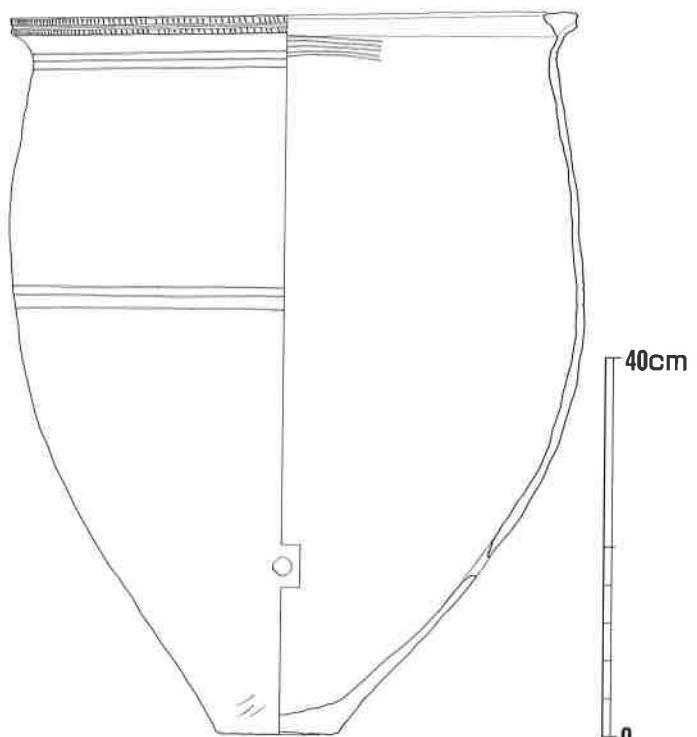
第16図 5号甕棺墓棺内出土遺物
実測図・1（縮尺1/3）



第17図 5号壺棺墓実測図（縮尺1/20）



第18図 5号壺棺墓内出土遺物実測図・2（縮尺2/3）



第19図 5号壺棺実測図（縮尺1/8）

れる。器表の色調は淡橙褐色を呈し、胎土には1mm程度の砂粒を含む。

下壺 大形の専用棺系土器である。口径60.0cm、器高75.8cm、胴部最大径60.0cm、底径11.6cmを測る。頸部付近と胴部の中位には、それぞれ3条の沈線が巡る。口縁部内側には粘土帯が貼り

付けられ、外面の上端部と下端部には刻目が施される。この両者の刻目は同時に施されたものである。器表の色調は橙褐色を呈し、胎土には1mm程度の砂粒を多く含む。胴部下位には直径2cm程度の穿孔が施される。また、外面の胴部の中位から下位にかけては、タテ35cm、ヨコ20cm程の黒斑がある。内面全体には赤色顔料が塗布されていた。

出土遺物 下甕の棺底部からは、碧玉製の管玉12点（第18図1～12）、アマゾナイト製の小玉2点（第18図13、14）、磨石1点（第16図）が出土した。玉類の計測値は表2に示す。磨石は花崗岩製であり、直径8.1～8.3cm、厚さ4.1cmを測り、片面の中央部に窪みがある。甕棺墓への副葬品としては異例であり、棺体の上部が削平された折に混入した可能性もある。また、被葬者の歯と思われる小片が出土している。

6号甕棺墓

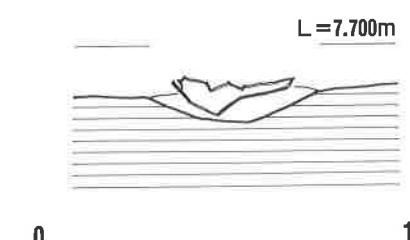
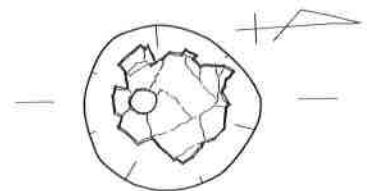
5号甕棺墓の北0.3mに位置する。甕棺墓とするには疑問もあるが、便宜上、甕棺墓として説明を加える。中型の壺形土器を用いた下甕の胴部下位のみの残存であるが、さらに底部も欠損している。主軸方位はN-3°-E、埋置角度は70°前後であろう。

下甕 中型の壺形土器であろう。

7号甕棺墓

5号甕棺墓の東1.8mに位置する。下甕は頸部より上位を打ち欠いた大形の壺形土器を用い、大形の甕形土器を用いた上甕で胴部最大径位付近までが覆われる。上甕は頸部以下の大半を削平により欠損している。主軸方位はN-97°-E、埋置角度は65°を測る。

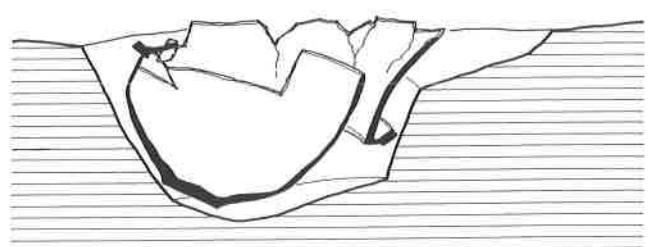
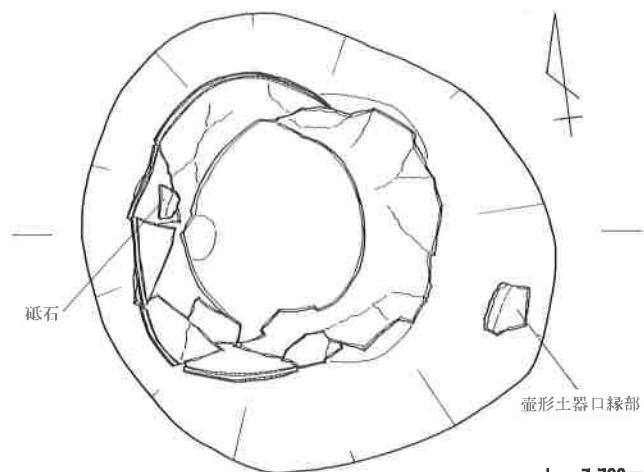
上甕 大形の専用棺系土器であり、橋口編年によるK I b型式に該当する。口径は75.8cmを測り、残存部の胴部最大径は75.4cmであり、それより下位を欠損する。胴部には3条の沈線が施され、その上位には一



第20図 6号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



第21図 6号甕棺実測図（縮尺1/8）

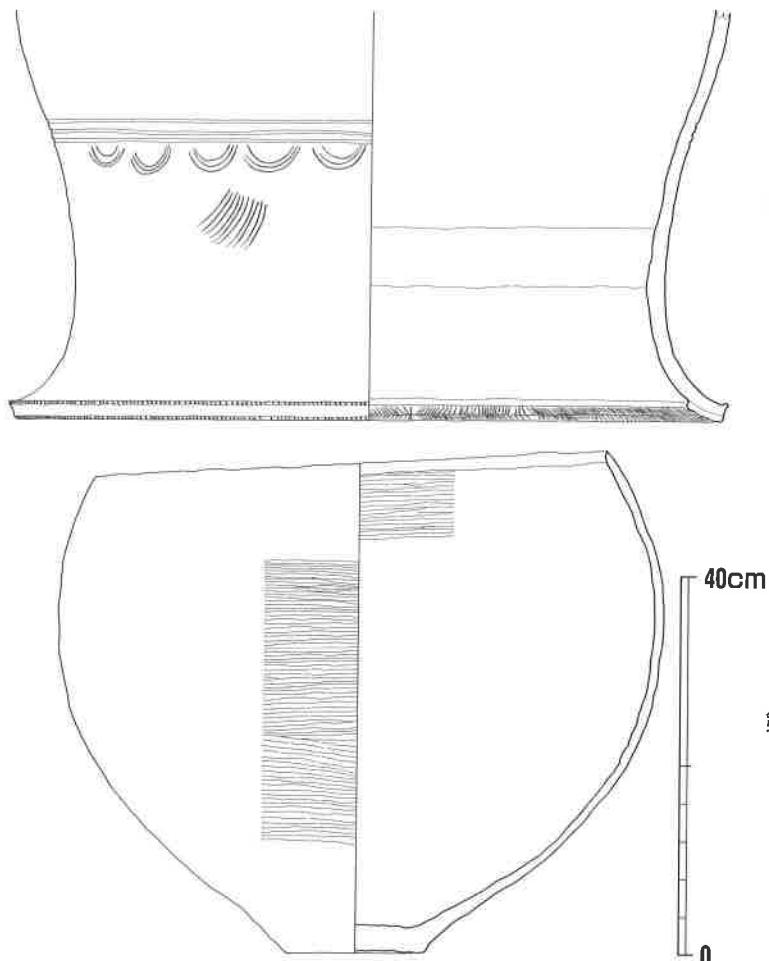


第22図 7号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

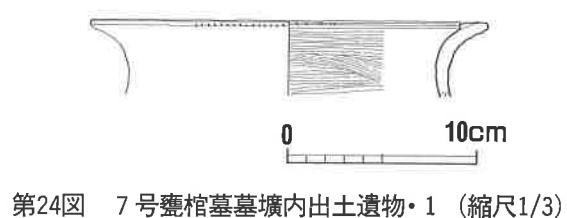
単位が3本の曲線による円弧文が連続して籠描きされている。また、そのさらに上位には10本の緩やかな曲線を連続して描いた籠描きの文様がある。欠損によりその全体的な配置は明らかではないが、少なくとも2単位の施文が確認される。但し、それらは対称的な位置関係はないようである。また、口縁部の上面には籠描きの有軸綾杉文が施される。基本的には2列の文様帶によって成るが、部分的には3列になる箇所もある。

下甕 大形の専用棺系土器である。残存高51.6cm、胴部最大径63.4cm、底径14.6cmを測る。頸部より上位を打ち欠かれ、内外面ともに横方向の研磨痕が残され、胴部下位には穿孔が施される。器表の色調は内外面ともに白灰色を呈し、還元炎霧囲気での焼成である。胎土には1mm程度の砂粒を多く含む。胴部下位には穿孔が施される。

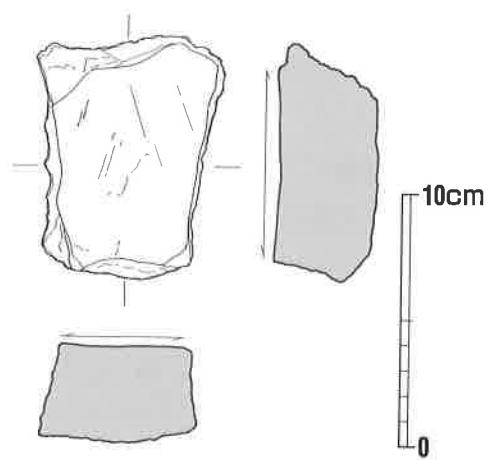
出土遺物 墓壙内より壺形土器の口縁部（第24図）と砥石1点（第25図）の出土があり、棺内からは打製石鏃1点（第26図）が出土した。第24図の壺形土器の口縁部は、口径は42.0cmを測り、残存高は8.0cmを測る。口縁外端部下端にはヘラ状工具による刻みが施され、内面には研磨痕が残される。器面の色調や胎土の特徴は下甕のそれと類似しており、打ち欠かれた下甕の口縁部の一部である可能性がある。第25図の砥石は残存長10.6cm、幅7.4cm、厚さ4.1cmを測る。砂岩系の石材が用いられる。研磨痕が残されるのは上面の1面のみである。第26図は黒曜石製の打製石鏃である。長さ2.3cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重さ1.2gを測る。



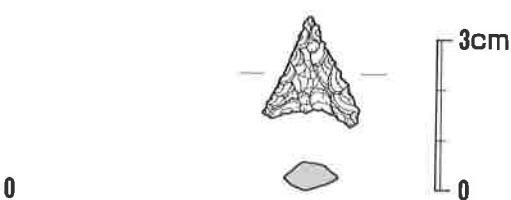
第23図 7号窯棺実測図（縮尺1/8）



第24図 7号窯棺墓墓壙内出土遺物・1（縮尺1/3）



第25図 7号窯棺墓墓壙内出土遺物・2（縮尺1/3）



第26図 7号窯棺墓棺内出土遺物（縮尺2/3）

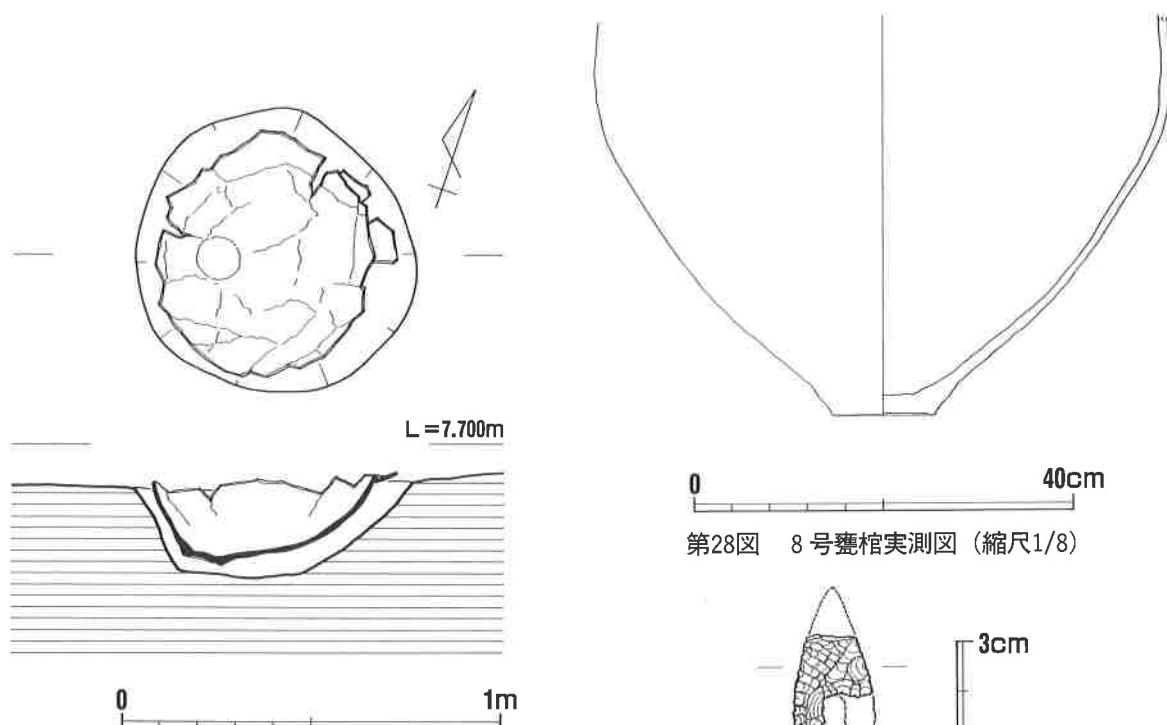
8号甕棺墓

7号甕棺墓の北西0.5mに位置する。主軸方位はN-71°-E、埋置角度は60°である。削平により下甕の上半部と上甕の殆どを欠損する。上甕は、下甕の胴部最大径位付近までを覆っていたようであり、その部分が僅かに残存するだけである。

上甕 小片であるため図示できない。器種も不明である。

下甕 大形の専用棺系土器である。胴部最大径は61.0cmに復元でき、残存高は42.2cm、底径は10.8cmを測る。器表の色調は橙褐色を呈し、胎土には1mm以下の砂粒を多く含む。器壁の損傷により穿孔の有無は確認できない。

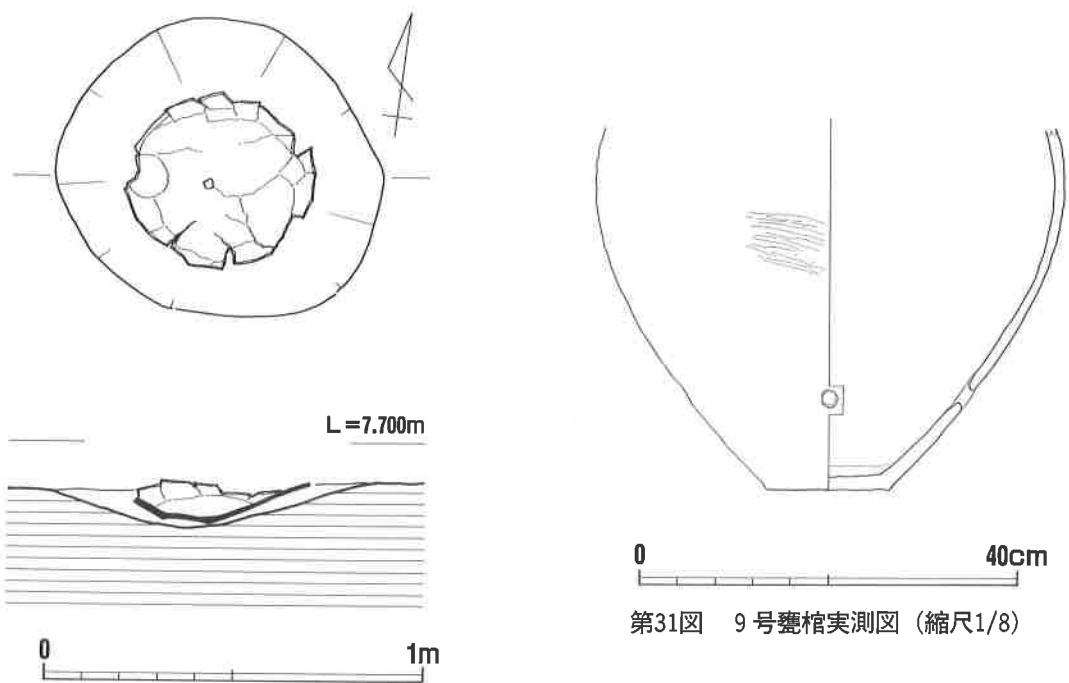
出土遺物 棺内より黒曜石製の打製石鏃1点（第29図）が出土した。基部の片側と、先端部を欠損するが、先端部については調査中の欠損である可能性が高い。石鏃の型式から、埋葬段階において混入したものだと思われる。



9号甕棺墓

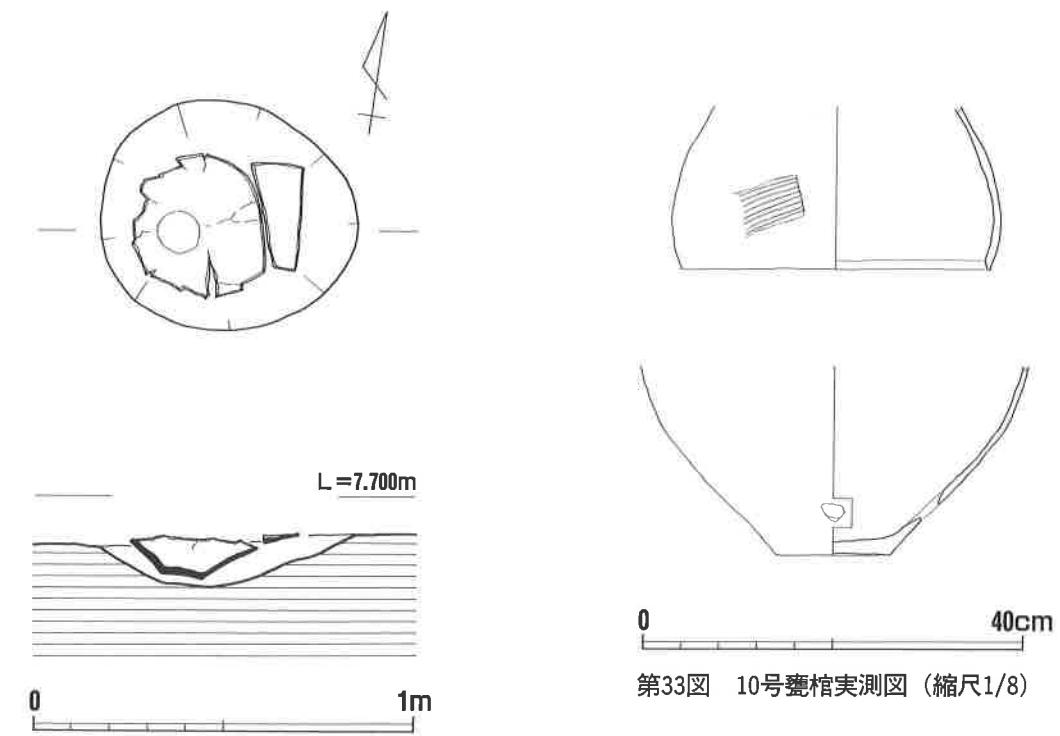
8号甕棺墓の北0.3mに位置し、その間にある14号甕棺墓により切られる。主軸方位はN-83°-E、埋置角度は44°を測る。下甕の頸部付近から上位を完全に欠損する。

下甕 脇部最大径は49.6cmに復元でき、底部は13.0cmを測る。器表の色調は橙褐色を呈し、外面には部分的に研磨痕が残る。また、外面には赤色顔料が塗布されていた可能性があり、外面の底部から5cm上の器表を巡る幅1cm前後の帯状の黒斑が残されており、輸送のために結ばれた縄のまま焼成されたものと思われる。脇部下位には穿孔が施される。



第30図 9号墓実測図（縮尺1/20）

第31図 9号墓実測図（縮尺1/8）



第32図 10号墓実測図（縮尺1/20）

第33図 10号墓実測図（縮尺1/8）

10号甕棺墓

9号甕棺墓の北東0.15mに位置する。主軸方位はN-82°-E、埋置角度は85°を示す。中型の壺形土器同士を組み合わせたものと思われる、両者ともに大半が削平により欠損しており、上甕は元位置を保っていないようである。

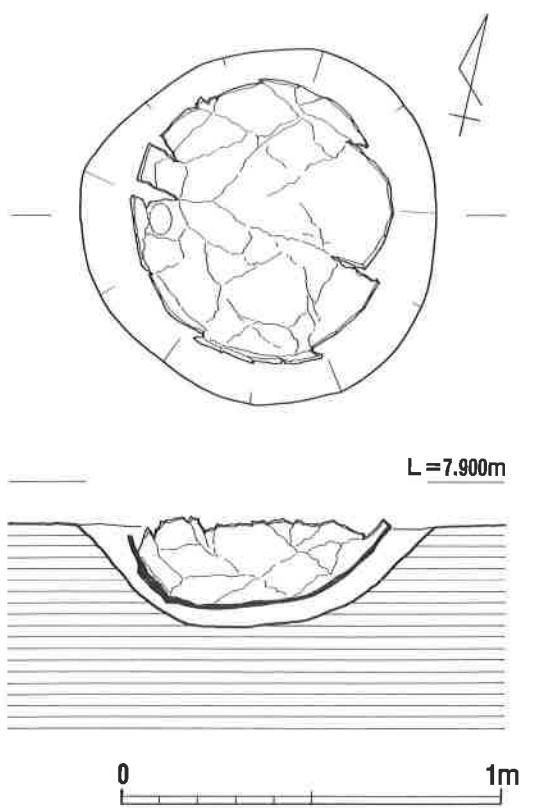
上甕 壺形土器であろう。胴部最大径は34.6cmに復元でき、頸部付近から打ち欠かれている。器表の色調は白灰色を呈し、胎土には1mm以下の砂粒を多く含む。

下甕 壺形土器であろうか。残存高は19.8cm、底径は11.6cmを測る。器表の色調は淡橙褐色を呈し、胎土には2mm以下の砂粒を多く含む。また胴部下位には径2cm前後の穿孔が施されている。

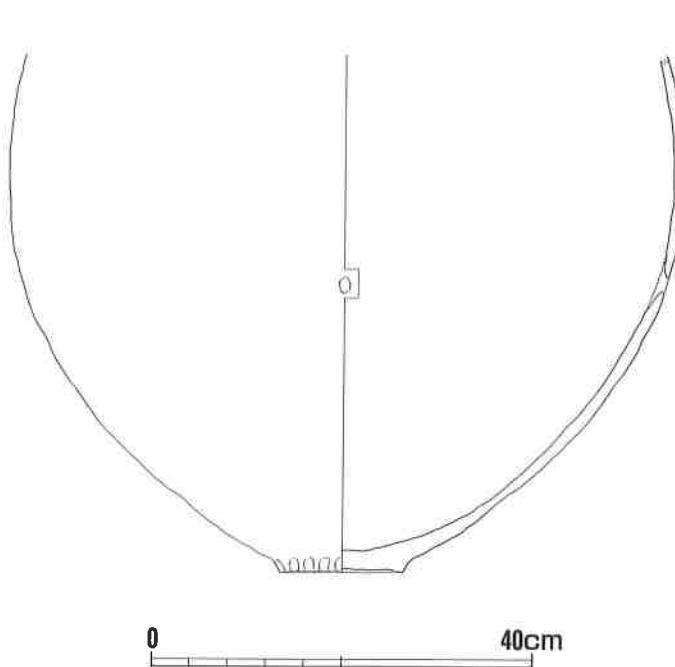
11号甕棺墓

10号甕棺墓の北東1.0mに位置する。主軸方位はN-77°-E、埋置角度は46°を示す。下甕の上半部以上を欠損する。

下甕 大形の専用棺系土器である。胴部最大径は71.0cmに復元でき、残存高は54.6cm、底径は13.0cmを測る。器表の色調は白灰色を呈し、部分的に橙色を帯びる。胎土には0.5mm以下の砂粒を多く含む。胴部中位には径1cm前後の穿孔が施される。



第34図 11号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



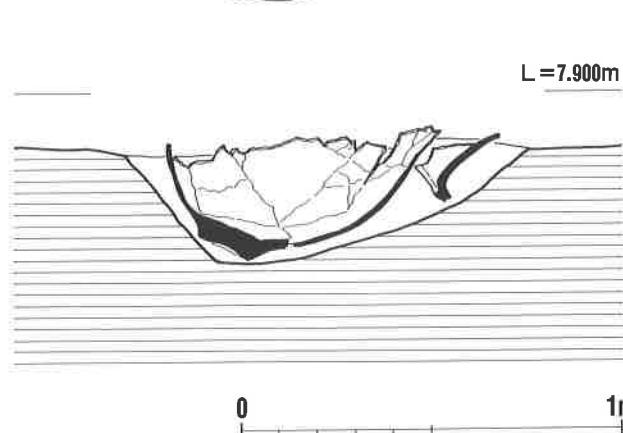
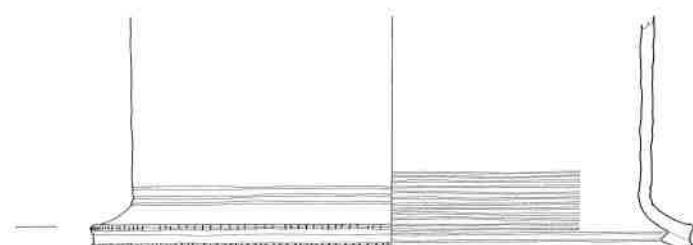
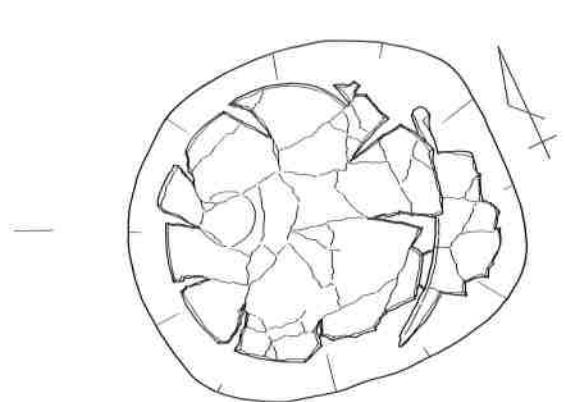
第35図 11号甕棺実測図（縮尺1/8）

12号甕棺墓

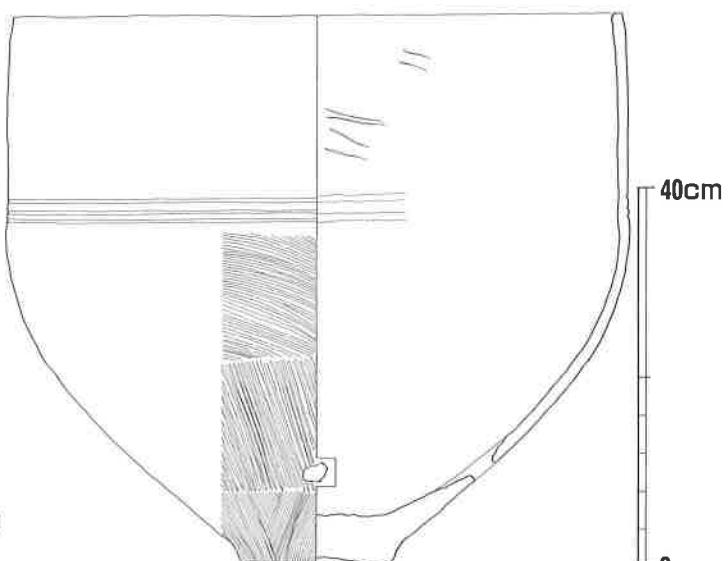
11号甕棺墓の北西1.6mに位置する。主軸方位はN-115°E、埋置角度は64°を示す。上甕、下甕とともに大形の専用棺系土器であり、上甕の口縁部は下甕の胴部中央部付近にまで及ぶ。

上甕 大形の甕形土器である。口径は63.9cmに復元でき、残存高24.4cmを測る。如意状に開いた口縁部の上面に粘土帯を貼り付け肥厚させ、外面の上端と下端には刻み目が施される。また、その下位には3条の沈線が巡る。口縁部から胴部にかけては直線的であり、胴部は砲弾形を呈するものであろう。

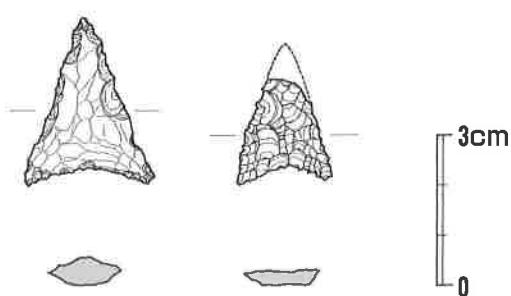
下甕 大形の専用棺系土器である。口縁部付近は打ち欠かれる。胴部最大径は65.8cmに復元でき、残存高58.2cm、底径は15.8cmを測る。底部底面は上げ底状を呈し4.5cmの厚みがある。胴部



第36図 12号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



第37図 12号甕棺実測図（縮尺1/8）



第38図 12号甕棺墓棺内出土遺物（縮尺2/3）

上位を欠損し、胴部中位には3条の沈線が巡る。胴部の立ち上がる沈線より下位の胴部には研磨痕が、底部付近には履け目調整痕が残る。また内面には削り痕が残る。器表の色調は淡橙褐色を呈し、胎土には1mm程度の砂粒を多く含む。胴部下位には 1.5×2 cmの穿孔が施される。

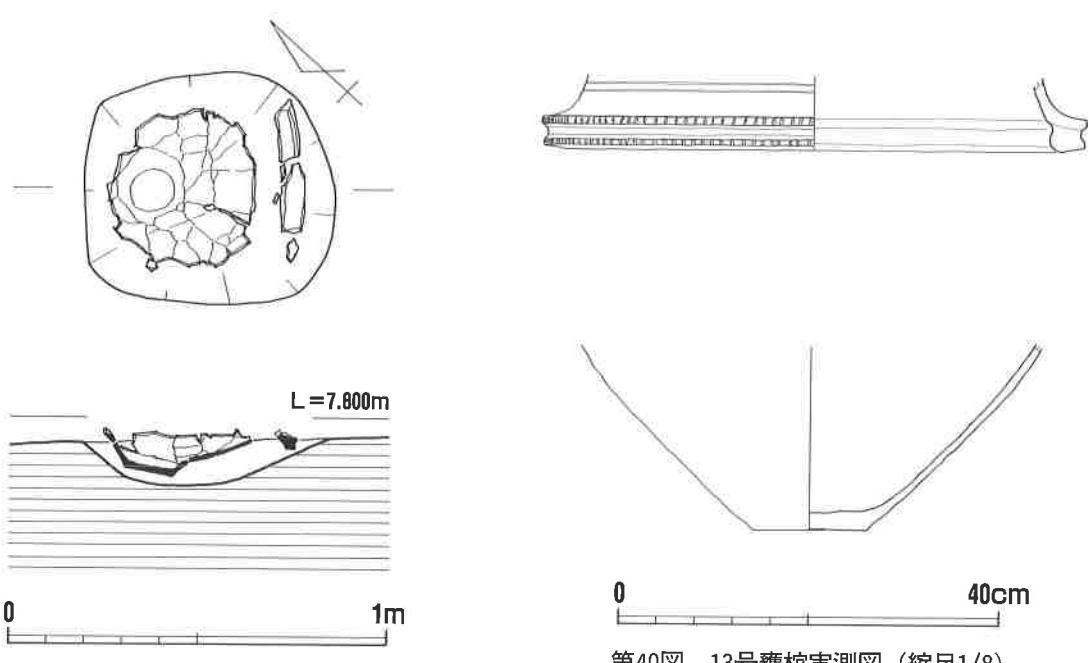
出土遺物 棺内より打製石鏃2点（第38図）が出土した。1は安山岩製であり、長さ3.4cm、幅2.65cm、厚さ0.6cm、重さ3.0gを測る。2は黒曜石製であり、先端部を欠損し、残存長2.1cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.0gを測る。

13号甕棺墓

12号甕棺墓の北東1.1mに位置する。主軸方位はN-138°-E、埋置角度は79°を示す。上甕は口縁部の一部を残すのみであり、下甕も底部付近のみの残存である。

上甕 大形の専用棺系土器である。残存高は7.8cmを測り、口径は57.2cmに復元できる。口縁部は上面に粘土帯を張り付けることにより肥厚化され、横方向の強い回転力によって整形される。その為、口縁部外面の上端部と下端部の境は大きく窪む。また、上端部と下端部には太い刻み目が施される。口縁部直下には少なくとも2条の沈線が巡る。器表の色調は白灰褐色を呈し、胎土には1mm程度の砂粒を含む。

下甕 底部付近のみの残存であるが壺形土器であろう。残存高19.4cm、底径11.8cmを測る。器表の色調は白灰褐色を呈し、僅かに橙色を帯びる。胎土には数mm程度の砂粒や1mm以下の砂粒を含むが、比較的少量である。胴部下位には1mm程度の穿孔が施される。



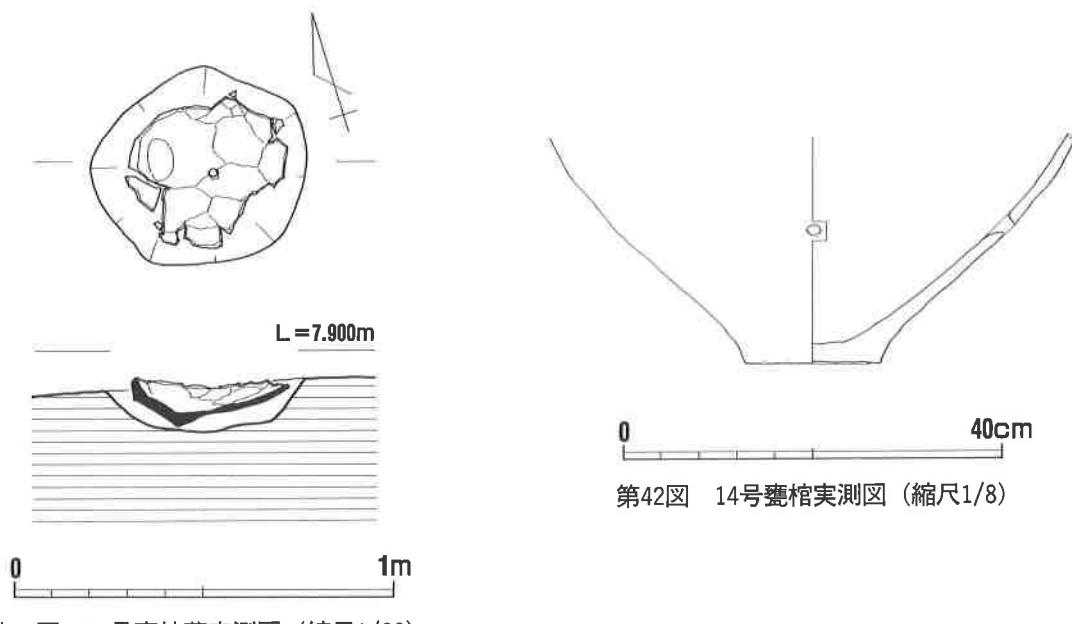
第39図 13号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

第40図 13号甕棺実測図（縮尺1/8）

14号甕棺墓

8号甕棺墓と9号甕棺墓の間に位置し、9号甕棺墓を切る。下甕の底部付近のみの残存である。主軸方位はN-107°-E、埋置角度は58°を示す。

下甕 残存高23.9cm、底径14.4cmを測る。器表の外面には赤色顔料が、内面には黒色顔料が塗布されている。顔料下の色調は白灰褐色を呈す。外面の底部付近には9号甕棺墓の下甕と同様に、幅1cm程度の帯状の黒斑が巡る。また、その上位には穿孔が焼成後の穿孔が施される。胎土には1mm程度の砂粒を多く含む。



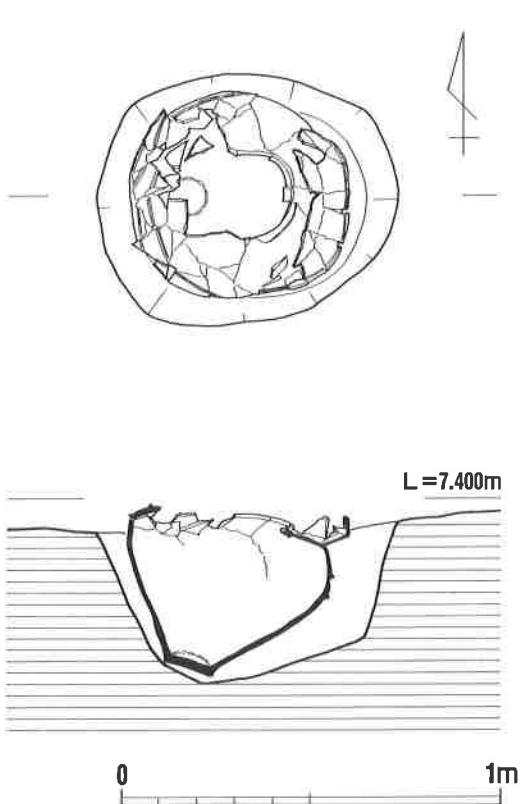
15号甕棺墓

一群を成す1～14号甕棺墓とは異なり、15～17号甕棺墓は調査区の北部に位置し3基で一群を成す。これらの群との間は、約28mの隔たりがある。

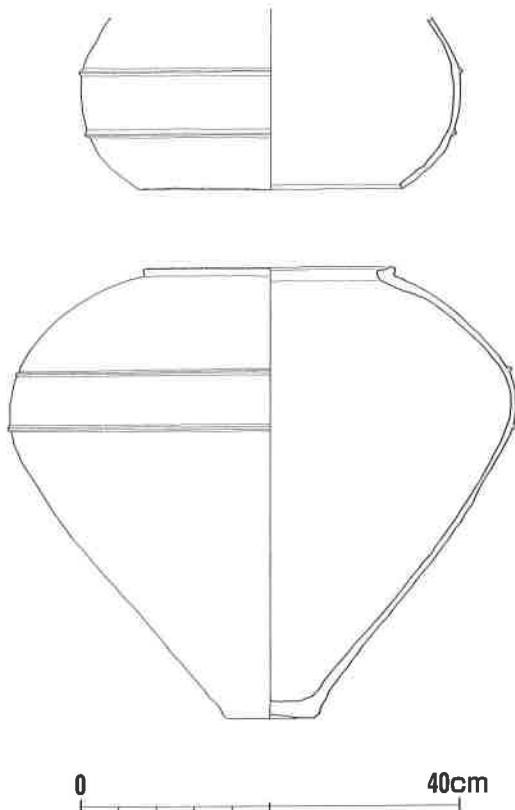
上甕、下甕ともに、頸部から上位を打ち欠いた転用された壺形土器を用いる。主軸方位はN-90°-Eを示し、埋置角度は69°である。

上甕 頸部以上を打ち欠かれた日常土器系の壺形土器である。底部は削平により欠損する。胴部最大径は40.2cmに復元でき、その上下にはそれぞれ一条の断面三角形の凸帶が巡る。器表の色調は白灰褐色を呈し、胎土には0.5mm程度の砂粒を含む。内面には赤色顔料が飛散した痕跡があるが、塗布されていたかどうかは不明である。

下甕 頸部の凸帶部から上位を打ち欠かれた日常土器系の壺形土器である。残存高47.6cm、胴部最大径53.6cm、底径9.0cmを測る。胴部最大径位の上下にはそれぞれ一条の断面三角形の凸帶が巡る。器表の色調は淡橙褐色を呈し、胎土には0.5mm程度の砂粒含む。



第43図 15号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



第44図 15号甕棺実測図（縮尺1/8）

16号甕棺墓

15号甕棺墓の南東0.1mに位置する。上甕に壺形土器、下甕に甕形土器を用いる。主軸方位はN-137°-Eを示し、埋置角度は54°である。

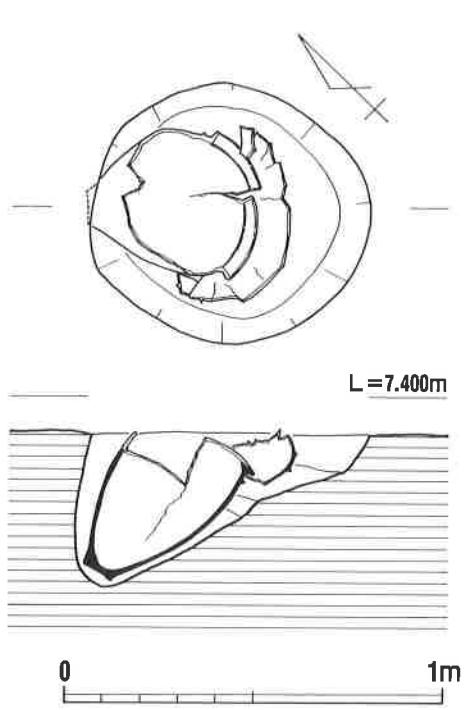
上甕 日常土器系の壺形土器である。頸部から上位を打ち欠き、底部は削平により欠損する。胴部最大径は42.0cmを測る。胴部最大径位に1条、その上位にもう1条の断面三角形の凸帯が巡る。器表の色調は淡橙褐色を呈し、胎土には0.5mm程度の砂粒を含む。

下甕 日常土器系の甕形土器である。器高47.6cm、口径36.6cm、胴部最大径36.4cm、底径8.8cmを測る。口縁部は逆L字状を呈し、その直下には1条の断面三角形の凸帯が巡る。器表の色調は淡橙褐色を呈し、胎土には1mm程度の砂粒を多く含む。

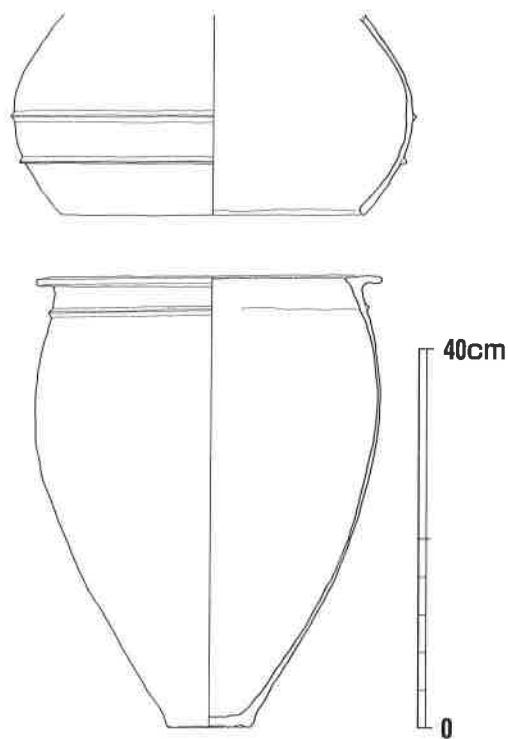
17号甕棺墓

16号甕棺墓の南0.3mに位置する。上甕の全てと下甕の大半を削平により欠損する。主軸方位はN-16°-Eを示し、埋置角度は34°前後であろう。

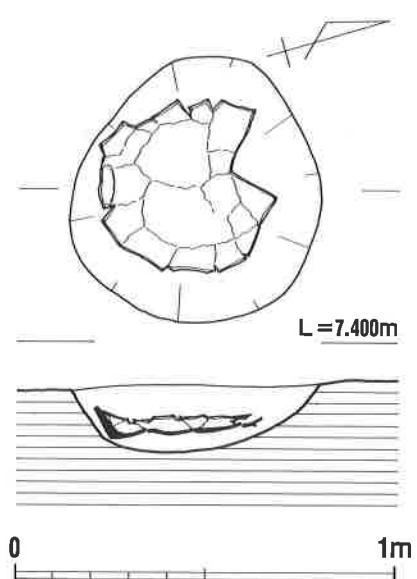
下甕 壺形土器であろうかとも思われるが、汲田式の甕棺であるのかも知れない。残存部分の胴部最大径は50.6cmに復元でき、残存高35.4cm、底径8.8cmを測る。胴部最大径位付近に1条の断面三角形の凸帯が巡る。器表の色調は、外面は淡橙褐色、内面は白灰色を呈す。



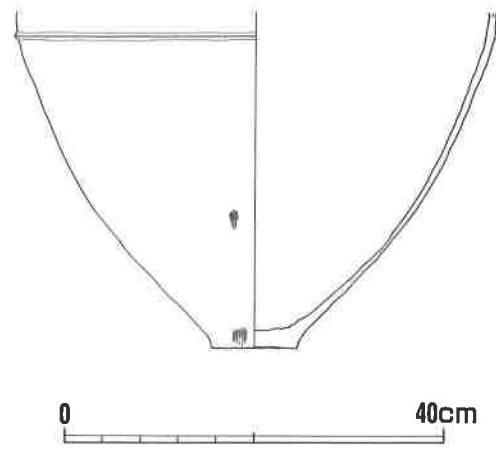
第45図 16号葬棺墓実測図（縮尺1/20）



第46図 16号葬棺実測図（縮尺1/8）



第47図 17号葬棺墓実測図（縮尺1/20）



第48図 17号葬棺実測図（縮尺1/8）

表1 龫棺墓一覧表

	主軸方位	傾斜角	上 龫	下 龫	棺内出土遺物
1	N-81°-E	78°			
2	N-51°-E	53°	大形甕	大形壺：口縁部打ち欠き 外面：赤色顔料	管玉5
3	N-86°-E	66°	大形甕：口縁部打ち欠き	大形甕	管玉2
4	N-74°-E	63°		大形甕 外面：赤色顔料	
5	N-83°-E	60°	大形甕	大形甕 内面：赤色顔料	管玉12、小玉2、磨石1
6	N-3°-E	70°			
7	N-97°-E	65°	大形甕	大形壺：口縁部打ち欠き	打製石鏃1
8	N-71°-E	60°		大形甕	打製石鏃1
9	N-83°-E	44°		外面：赤色顔料	
10	N-82°-E	85°			
11	N-77°-E	46°		大形甕	
12	N-115°-E	64°	大形甕	大形甕：口縁部打ち欠き	打製石鏃2
13	N-138°-E	79°	大形甕		
14	N-107°-E	58°		外面：赤色顔料 内面：黒色顔料	
15	N-90°-E	69°	転用壺：口縁部打ち欠き	転用壺：口縁部打ち欠き 内面：赤色顔料	
16	N-137°-E	54°	転用壺：口縁部打ち欠き	転用甕	
17	N-16°-E	34°			

表2 龫棺墓出土玉類計測表

単位：mm

甕棺	No.	長さ	直径	材質	備考	甕棺	No.	長さ	直径	材質	備考
K2	1	6.10	3.00	碧玉		K5	5	6.50	3.50	碧玉	一部欠損
	2	5.90	3.30	碧玉	一部欠損		6	6.70	3.30~3.50	碧玉	
	3	5.55	3.20	碧玉	一部欠損		7	6.70	3.70	碧玉	
	4	5.60	3.30	碧玉	一部欠損		8	6.50	3.30	碧玉	
	5	4.70	3.40	碧玉	一部欠損		9	6.40	3.35	碧玉	一部欠損
K3	1	9.35	3.00	碧玉			10	6.20	3.60	碧玉	
	2	8.30	3.00	碧玉			11	5.90	3.15	碧玉	
K5	1	9.45	3.55	碧玉			12	5.80	3.35	碧玉	
	2	7.90	3.10	碧玉			13	3.40	4.90	アマゾナイト	
	3	7.70	3.55	碧玉			14	2.40	4.00~4.50	アマゾナイト	
	4	7.60	3.30	碧玉							

3. その他の遺構と遺物

1号竪穴住居跡

調査区の北東部に位置する。西壁、並びに南西隅部を6号溝状遺構に切られる。平面形はほぼ東西に細長い長方形を呈し、東西3.2m、南北2.4m、遺構検出面から床面までの深さは0.1mである。主柱穴は4本柱であるが、軸の方向は壁の中軸方向とずれがある。

出土遺物

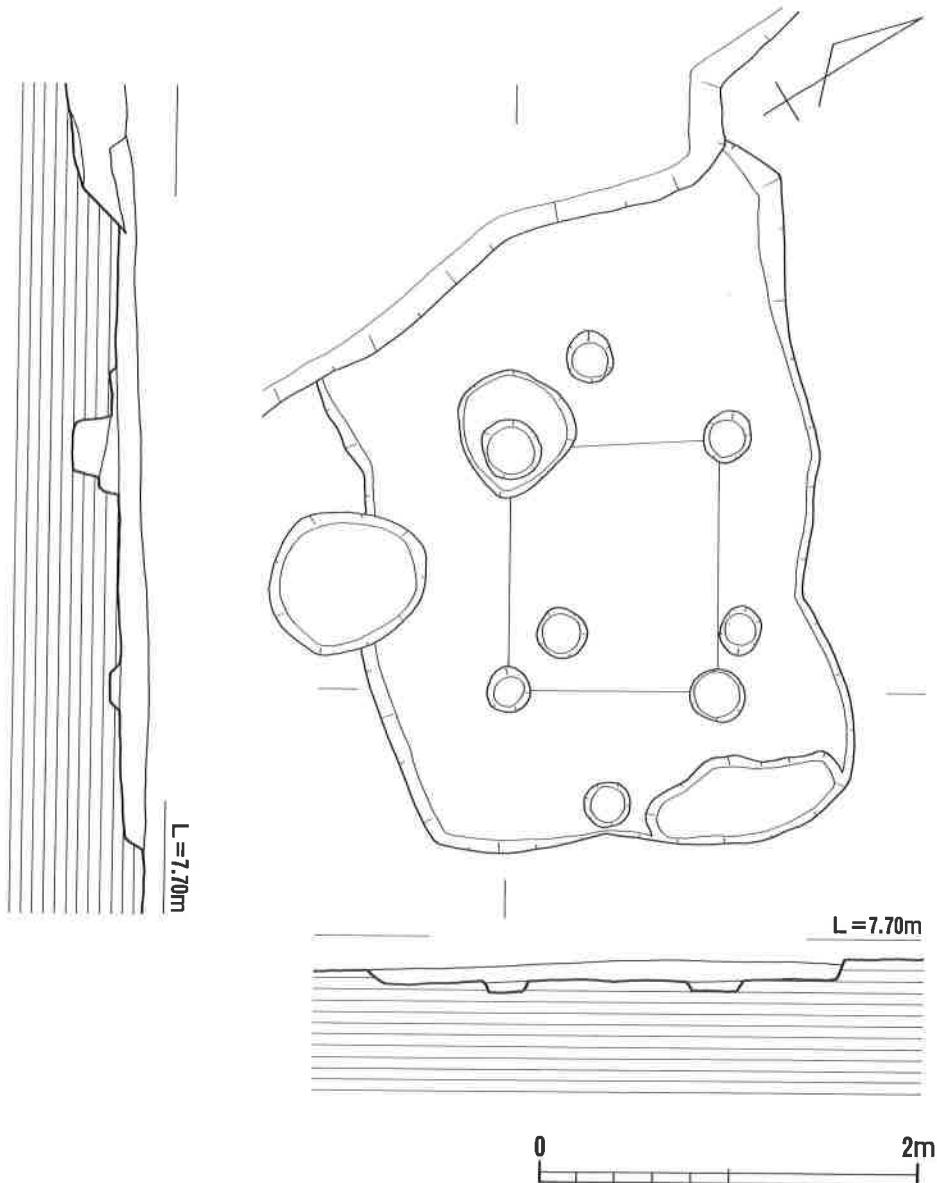
1は甕形土器である。口径は19.4cmに復元され、口縁部には箆状工具による刻みが施される。器表の磨耗により器面調整は不明である。胎土には1mm以下の小砂粒を多く含み、焼成は良好であり、断面の色調は明橙褐色を呈する。

2は口径21.0cmに復元される甕形土器である。口縁部には箆状工

具による刻みが施される。全体的に器表の剥落が見られるが、口縁部の内面側には指頭圧痕と刷毛目調整痕が残される。胎土には1mm以下の小砂粒を含み、焼成は良好で色調は淡橙白色を呈する。

3は口径21.0cmに復元される甕形土器である。口縁部には箆状工具による浅い刻み目が施される。外面には刷毛目調整痕、内面には板状工具による削り痕、指頭圧痕が残る。胎土には1mm前後の小砂粒を含み、焼成は良好。内外面ともに煤が付着するが、煤の付着しない部分の色調は橙褐色を呈する。

4は刻み目突帶文系の甕形土器である。小片であるため口径は復元できない。口縁部外側に箆



第49図 1号竪穴住居跡実測図（縮尺1/40）

状工具による刻みが施された突帶が貼付される。器表は全体的に磨耗しているものの、内外面ともに刷毛目調整痕が残される。胎土には1～2mm前後的小砂粒を多く含み、色調は白褐色を呈する。焼成はやや軟質である。

5は壺形土器の小片であり、頸部と胴部の境目の段を呈する部分である。胎土には0.5mm以下の小砂粒を含み、焼成は良好で、器表の色調は外面は黒灰色、内面は橙褐色を呈する。器面調整は器表の磨耗により確認できない。

6は鉢形土器の口縁部付近の資料である。全体的に器表の磨耗が著しい。口縁部は僅かに肥厚し、胴部の屈曲部には突帶が貼付されるが刻みの有無は前述の理由により明らかではない。胎土には1～2mmの小砂粒を含み、焼成は軟質である。色調は橙褐色を呈する。

7は口径19.2cmに復元される壺形土器である。口縁部はあまり窄まらず、直立気味に外側に向かって立ち上がる。全体的に研磨調整が施されていたものと思われるが、器表の磨耗のために明らかではない。また、口縁部の内面側の一部と胴部の外側の一部に丹塗りの痕跡が残されている。胎土は微小な砂粒を含むものの精錬されており、焼成は良好。器表の色調は淡橙褐色を呈する。

8は壺形土器の胴部付近である。胴部最大径は25.8cmに復元される。頸部と胴部の境には削り出しによる段を有し、その下位には籠状工具による三本線の山形文が施される。また、この山形文の一部には丹塗り痕跡が残されている。器表の磨耗により器面調整痕は不明確である。胎土には砂粒を少量含むものの精錬されており、焼成は良好である。器表の色調は白褐色を呈する。

9は鉢形土器である。胴部の屈曲部径は32.2cmに復元される。器面調整は不明瞭であるが、外面には斜め方向の刷毛目痕が残る。胎土には1mm前後の小砂粒を含み、比重が重い。焼成は良好であり、器表の色調は外面淡橙褐色、内面白灰色である。

10は高杯の口縁部周辺である。口径38.2cmに復元される。器表の磨耗が著しいが、内面には丹塗りの痕跡が認められる。胎土には1mm程度の砂粒を含み、壺形土器よりも甕形土器の胎土に近い。焼成はややあまく軟質であり、器表の色調は淡橙褐色を呈する。

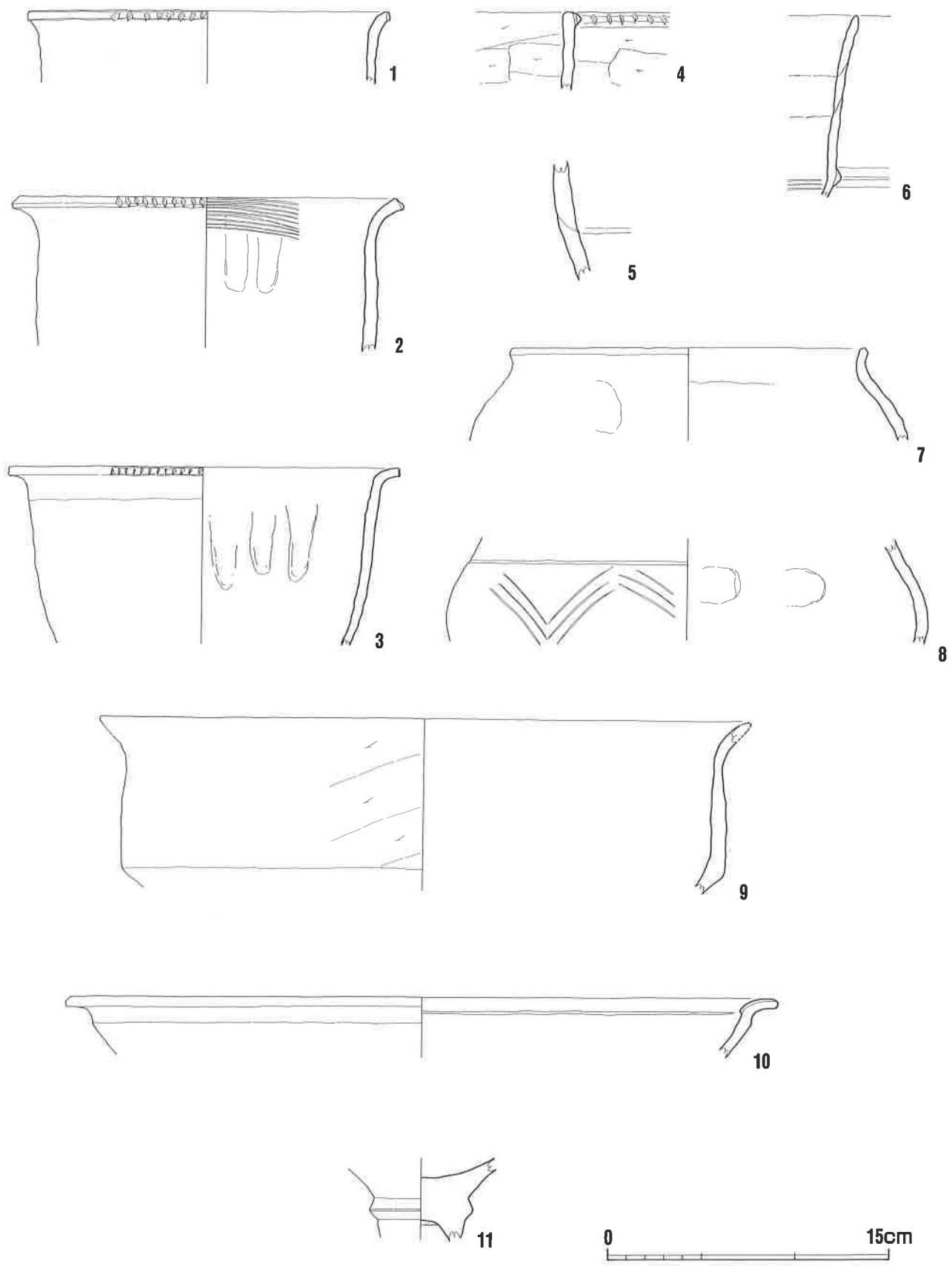
11は高杯の体部と脚部の境目付近であり、断面三角形の凸帶が貼付される。器面調整は器表の磨耗により不明である。胎土には2mm以下の小砂粒を含み、焼成は良好である。

12は安山岩質の石材を用いた半月形外湾刃の石包丁である。約1/3程度の残存であり、残存長4.0cm、幅5.8cm、厚さ0.6cm、現存重量23.2gを測る。

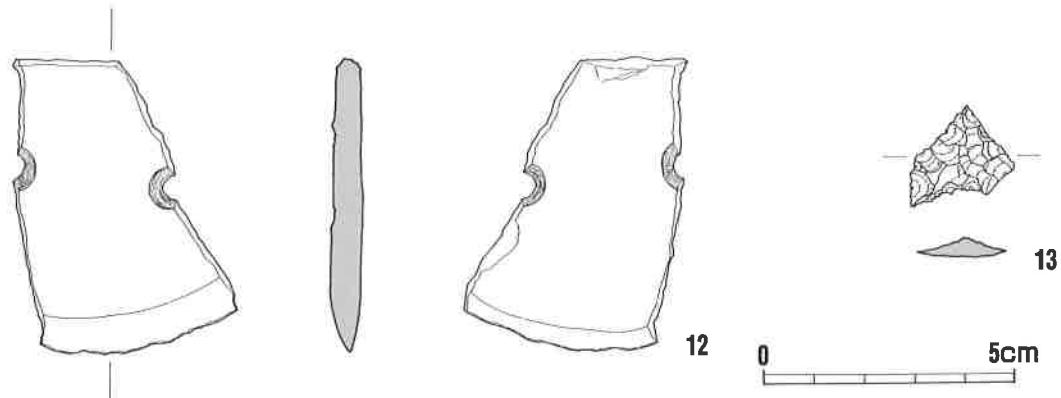
13は黒曜石製の石鎌である。基部の一端を欠損する。長さ2.0cm、残存幅2.1cm、厚さ0.4cm、重さ0.8gを測る。

SX-01

調査区西部の甕棺墓群の北東部で検出された。墳墓の石蓋、或いは標石かとも思われたが、隣接して流れる農業用水路からの著しい漏水、地下からの湧水により調査を断念し、遺構の保全を保ったまま埋め戻した。



第50図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図・1 (縮尺1/3)



第51図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図・2（縮尺2/3）

1号溝状遺構

調査区西部を北東方向に延びる溝状遺構である。西端部は調査区外に延び、長さ10m、最大幅1.5m、深さ0.3~0.4mを測る。弥生時代中期前半~中頃の土器が出土した。

2号溝状遺構

調査区西部の甕棺墓群の東側を屈曲しながら南北方向に延びる溝状遺構である。東端部は調査区外に延びる。長さ13.0m、最大幅0.8m、深さ0.3~0.4mを測る。埋土からは汲田式の甕棺、口縁部を打ち欠かれた壺形土器が投げ込まれたような状態で出土した。

3号溝状遺構

長さ5.1m、最大幅0.7m、深さ0.3mを測る。

4号溝状遺構

長さ9.9m、最大幅1.5m、深さ0.2~0.5mを測る。

5号溝状遺構

長さ5m、最大幅1.3m、深さ0.2mを測る。

6号溝状遺構

調査区の東部を南北方向に延びる溝状遺構である。南端部は5号溝状遺構と連結し、北端は調査区外に延びるが、長さ30mにわたって検出された。最大幅は1.8m、深さは0.3mを測る。

第3章 おわりに

1. 蔕棺の型式について

今回の発掘調査によって検出された17基の蔚棺墓のうち、口縁部から底部までの全ての部位が残存するものは5号蔚棺下蔚、16号蔚棺下蔚のみである。また、これ以外で比較的良好な遺存状態を保つものとしては、2号蔚棺上・下蔚、3号蔚棺下蔚、5号蔚棺上蔚、7号蔚棺上・下蔚、12号蔚棺上・下蔚、15号蔚棺下蔚であり、これらのうち成人棺である2・3・5・7・12号蔚棺について検討してみたい。これらの成人棺の中でキーポイントとなるべきものは、5号蔚棺と7号蔚棺である。頸部の窄まる丸みを帶びた胴部など、未だ壺の形態を色濃く残した下蔚の形態、如意状に開いた口縁部の上面（内面）に概ね器壁の厚さ以下の比較的薄い粘土帯を貼付した上蔚の形態などから、7号蔚棺はこれらの中では最も古く位置付けられるものであり、2号蔚棺とはほぼ同型式である。これに対し5号蔚棺下蔚は、底部へ向かって殆ど湾曲せずに窄まる倒卵形に近い胴部を呈し、口縁部は外側にはあまり開かず内側に粘土を貼付する。この粘土は粘土帯というよりはむしろ、太い粘土紐といった形状である。この口縁部は汲田式の祖形的ともいえる形狀であり、群中の成人棺の中では最も新しい段階に位置する。また5号蔚棺上蔚は、如意状に外側に開いた口縁部の上面への器壁の厚さ以上に厚い粘土帯の貼付など、5号蔚棺下蔚よりも先出する要素をもち、3号・12号蔚棺とともに、7号蔚棺と5号蔚棺下蔚との間に位置付けられるものである。胴部の立ち上がりの形態などから3号蔚棺よりも12号蔚棺が後出するものと考えられる。そしてこれらを橋口編年に当て嵌めるならば、2号・7号蔚棺（K I b式）→3号・12号蔚棺・5号蔚棺上蔚（K I c式）→5号蔚棺下蔚（K II a式）となる。また情報量が少ないものの、11号蔚棺はK I b式、13号蔚棺上蔚はK I c式に該当するものであろう。小児棺である15・16号蔚棺は、K II c～K III a式併行型式の日常土器系の壺や蔚を用いたものである。

2. 蔚棺墓の群構成について

ここでは弥生時代前期後半から中期初頭にかけての墓群であり、調査区南部に位置する1号蔚棺墓から14号蔚棺墓について検討する。まず主軸方位についてであるが、概ね東方向を向くものが多い。明らかに別の方向を向く6・12・13・14号墓を除けば、最も北偏する2号蔚棺墓がN-51°-E、南偏する7号蔚棺墓がN-97°-Eであるので、46°の幅の中に10基が位置することになる。墓群中の主軸方位に偏りがある場合何らかの要因が介在するものであろうが、地形に影響されたとするならば丘陵の尾根線方向に關係するものであろうか。またこの墓群は、2～4基からなる小群の集合体によって構成されており、これはかつて二丈町深江で調査を行った、弥生時代中期の汲田式を主体とする蔚棺墓群である木舟三本松遺跡の群構成に類似している。例えば、1号蔚棺墓と2号蔚棺墓、3号蔚棺墓と5号蔚棺墓、12号蔚棺墓と13号蔚棺墓などはそれぞれが最近隣接関係にあり、主軸方位も近く、併設されたかのようである。これらは周辺の蔚棺墓を含みながら小群を成している。また、副葬品を伴う蔚棺墓が近接して墓群中に偏在する点も木舟三本松遺跡と類似しており、両者間には時期的な差異があるものの、墓群全体における主軸方位の偏りも含め、通有の社会構造、習俗に起因するものかも知れない。

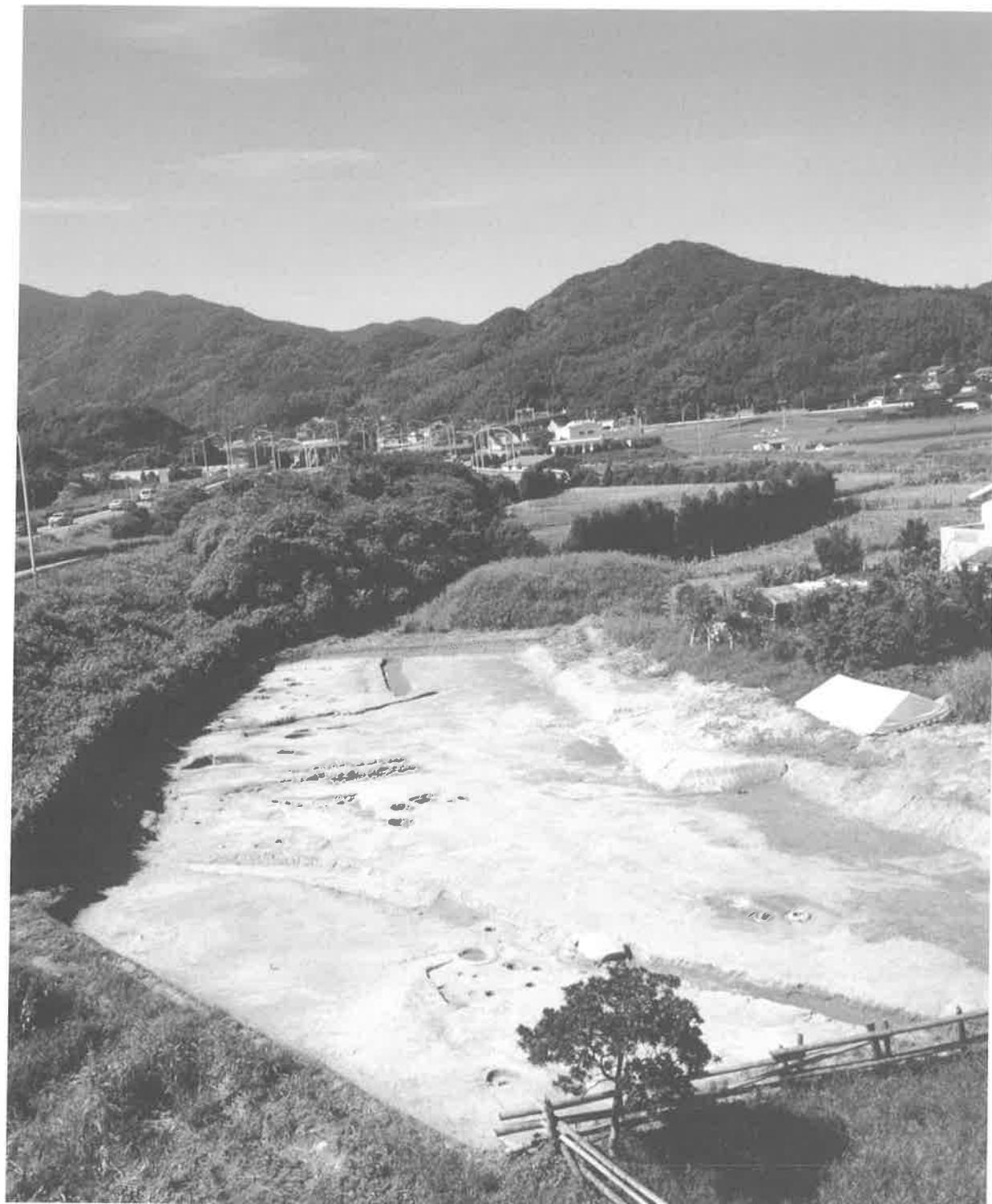
図版

図版 1



広田遺跡上空・空中写真（東から）

図版2



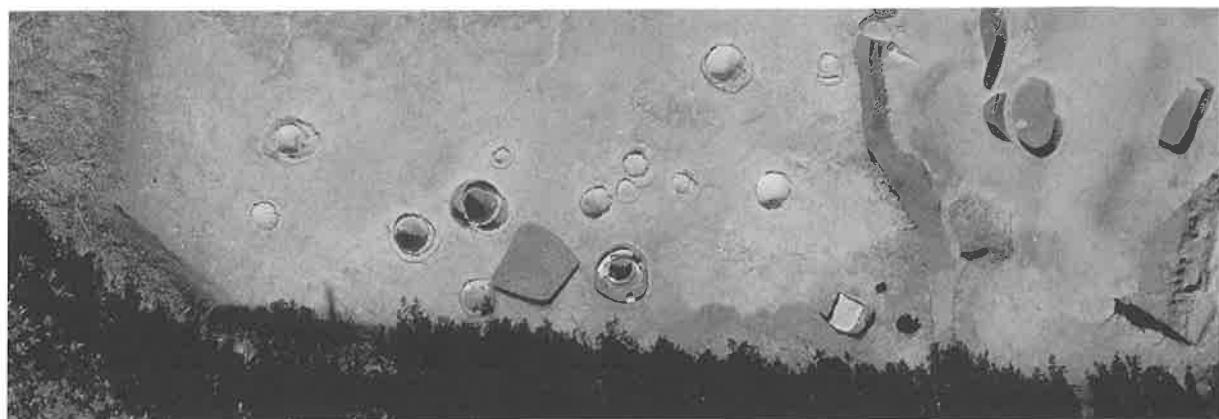
広田遺跡IV区全景（東から）

図版3



広田遺跡IV区全景（空中写真）

図版4

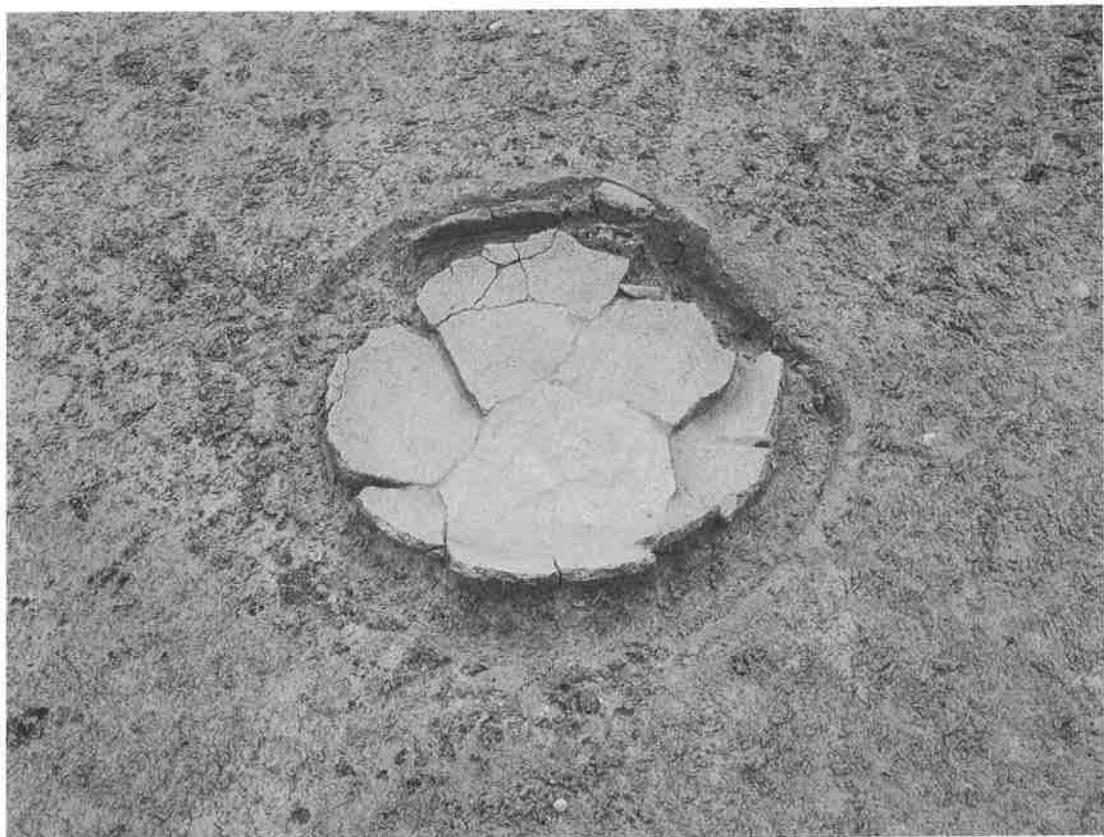


調査区南西部壺棺墓群（空中写真）

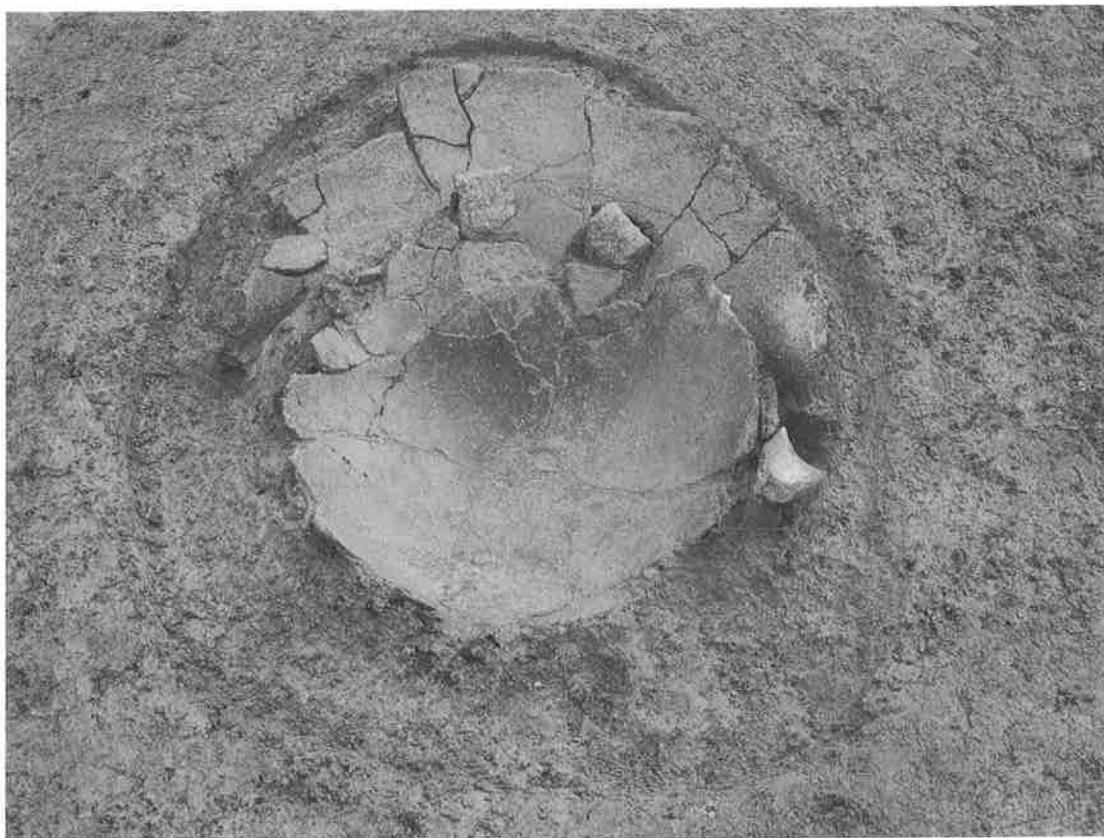


調査区東部全景（空中写真）

図版5

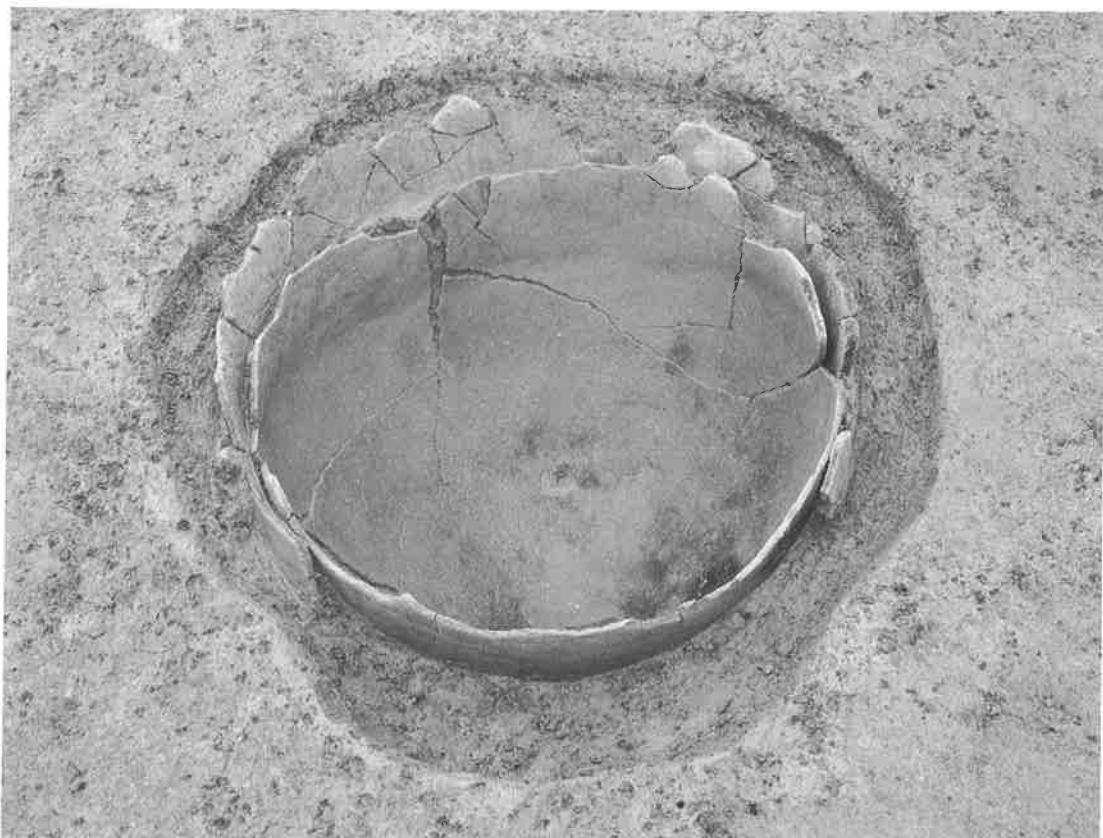


1号壺棺墓（西から）



2号壺棺墓（西から）

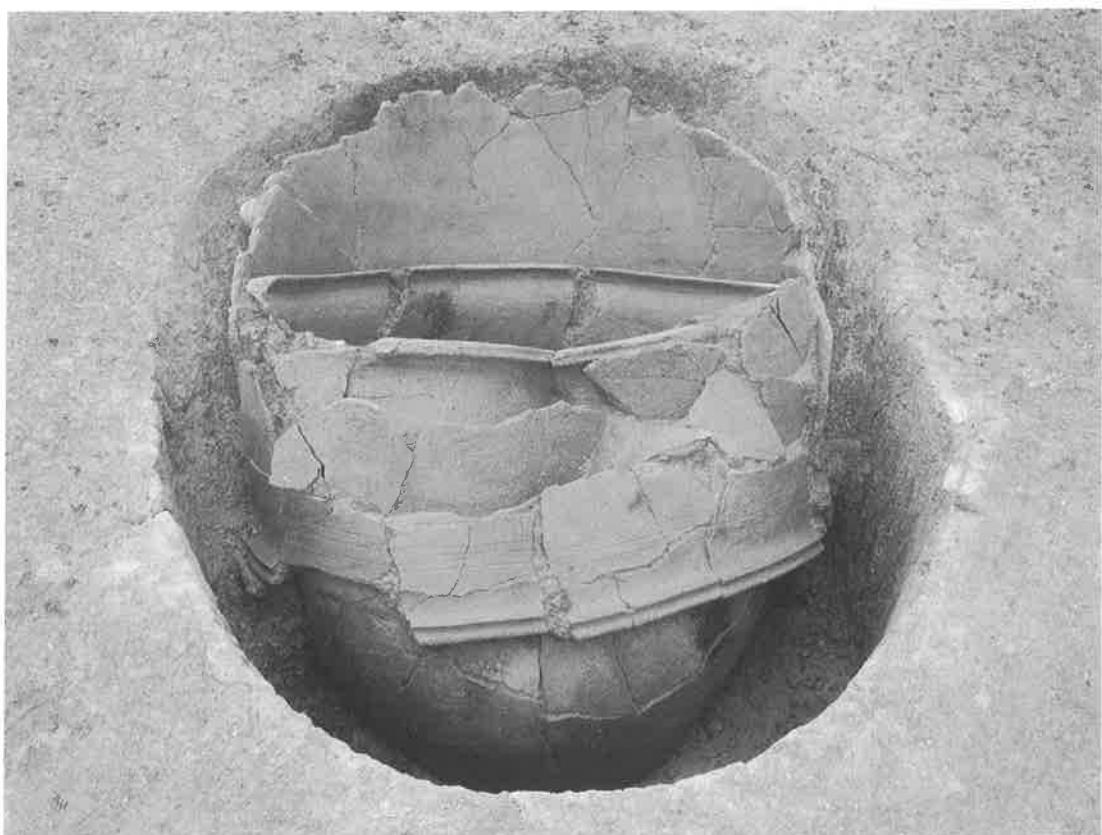
図版6



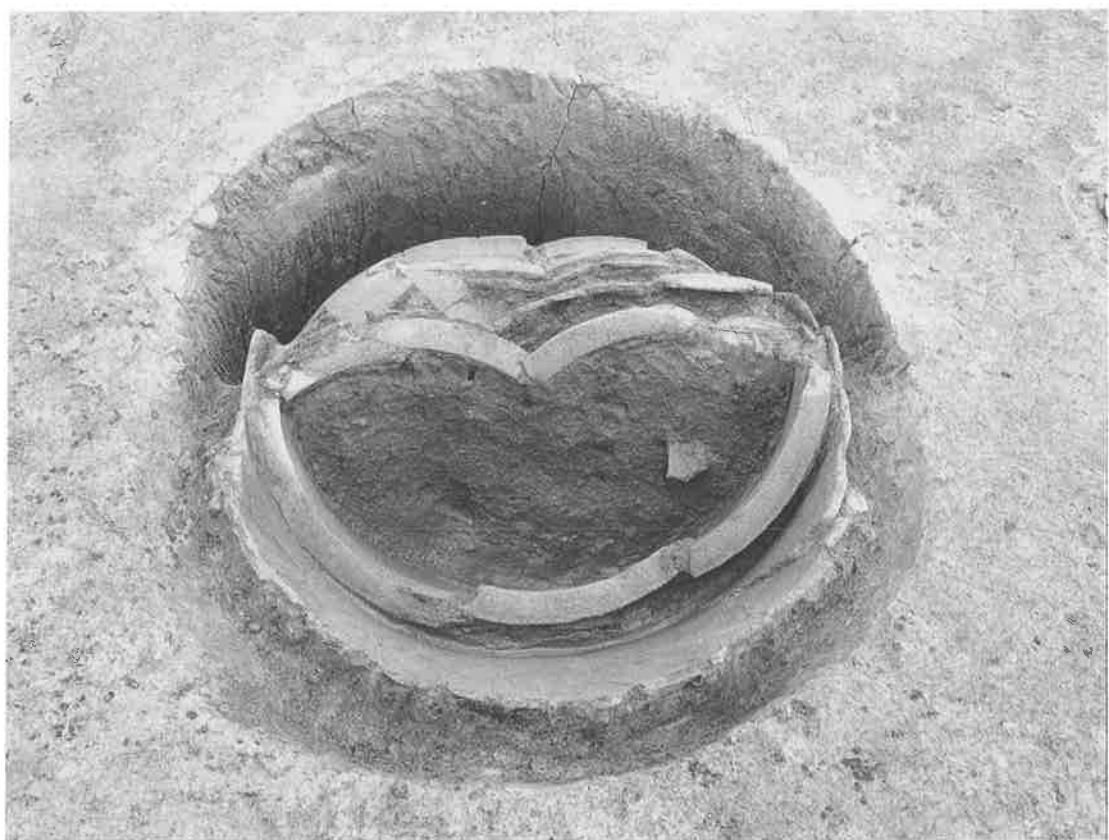
3号壺棺墓（西から）



4号壺棺墓（西から）

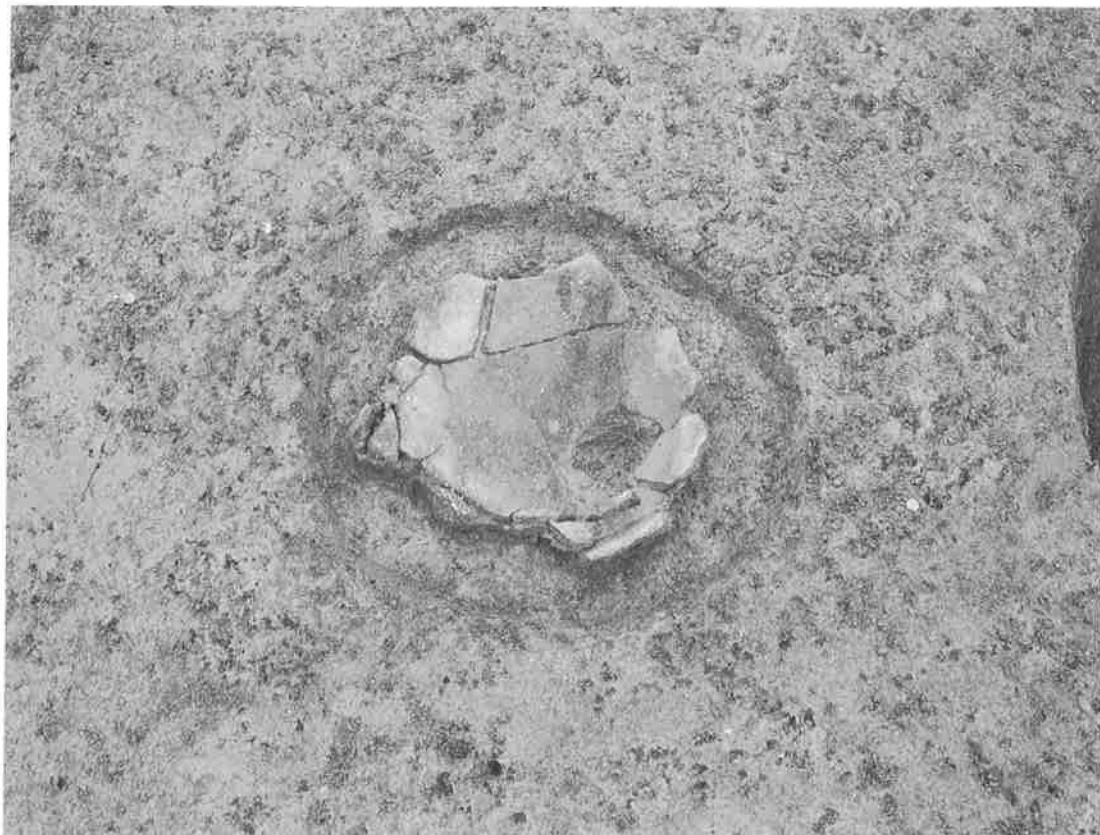


5号甕棺墓（西から）

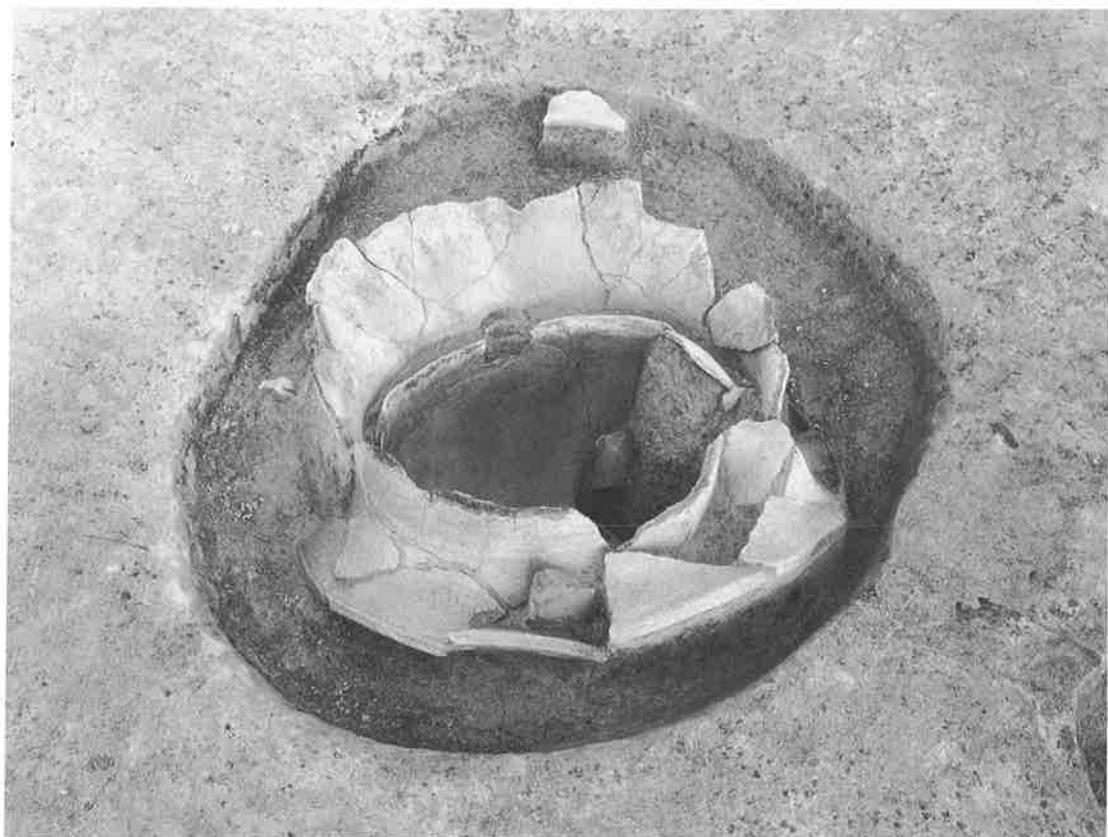


5号甕棺墓（東から）

図版8

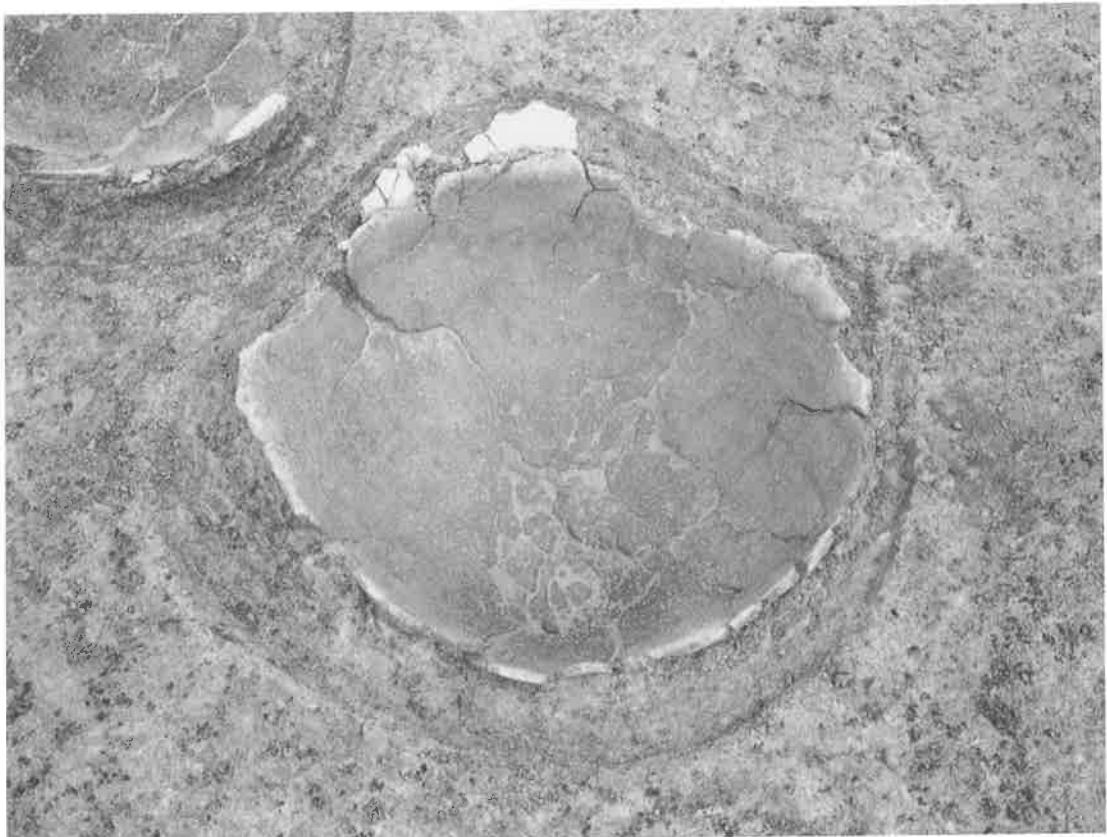


6号甕棺墓（西から）

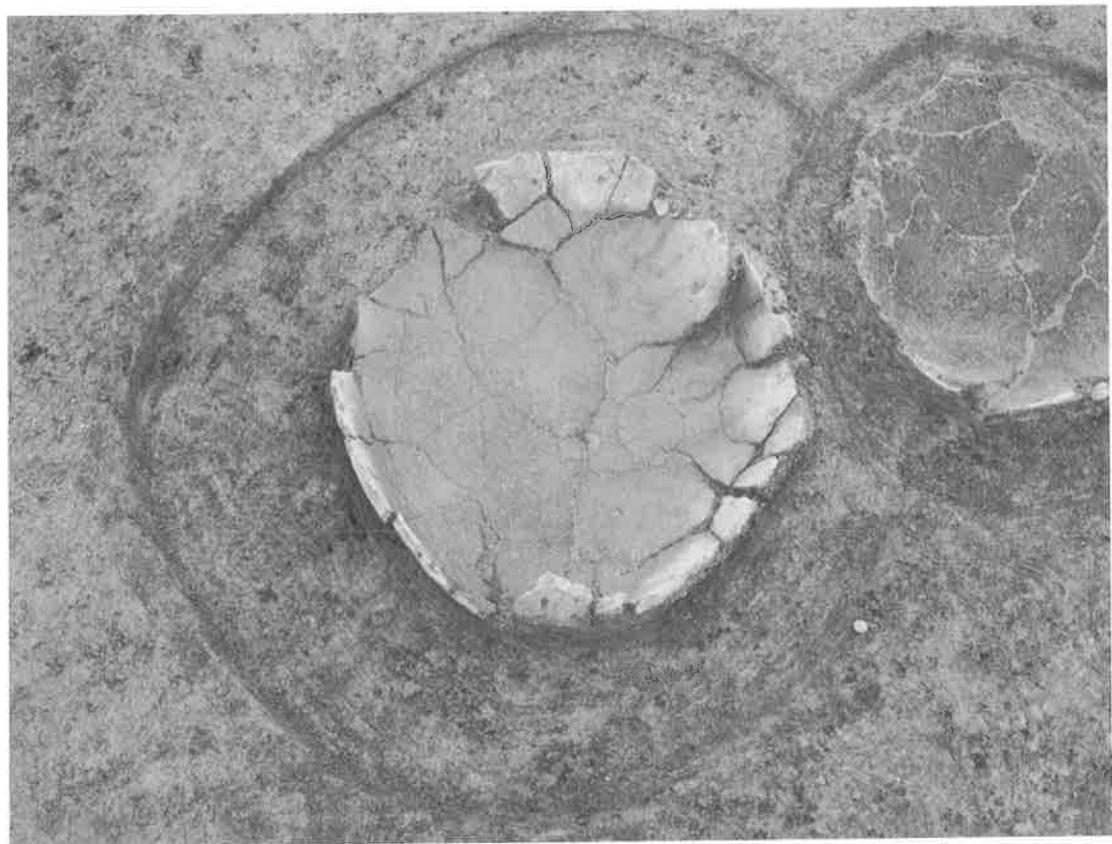


7号甕棺墓（西から）

図版9



8号甕棺墓（西から）

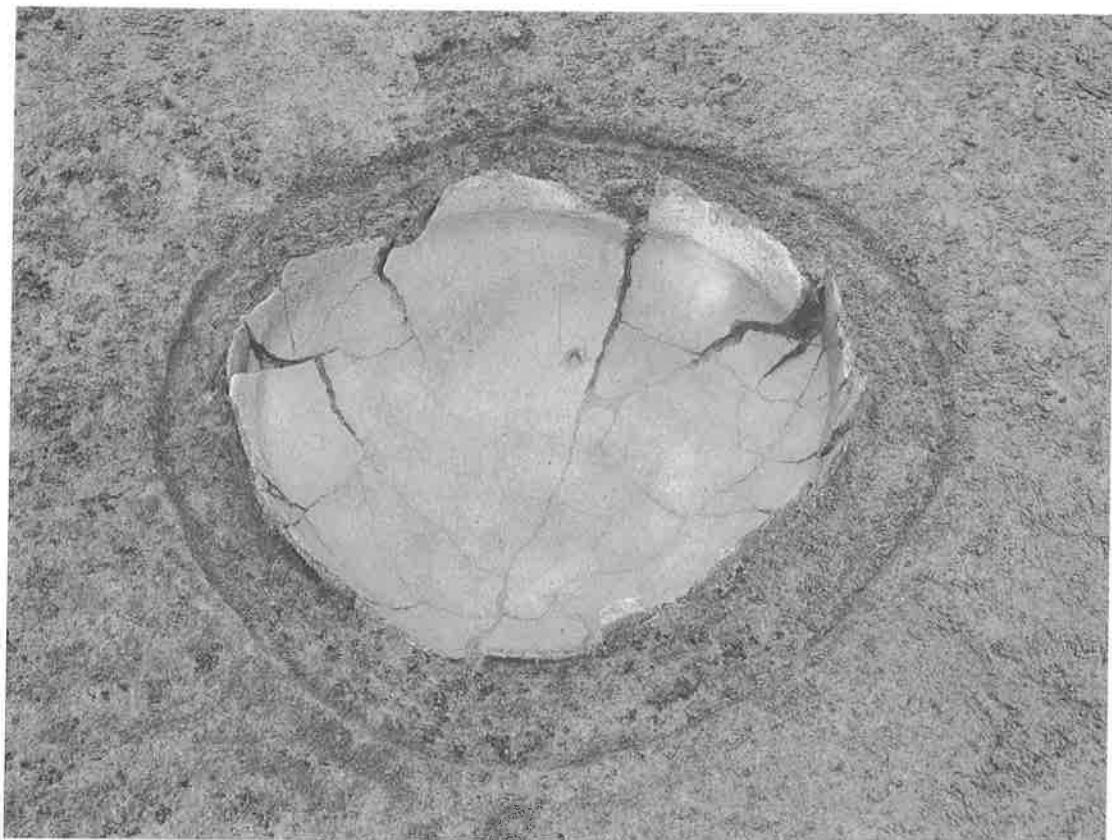


9号甕棺墓（西から）

図版10

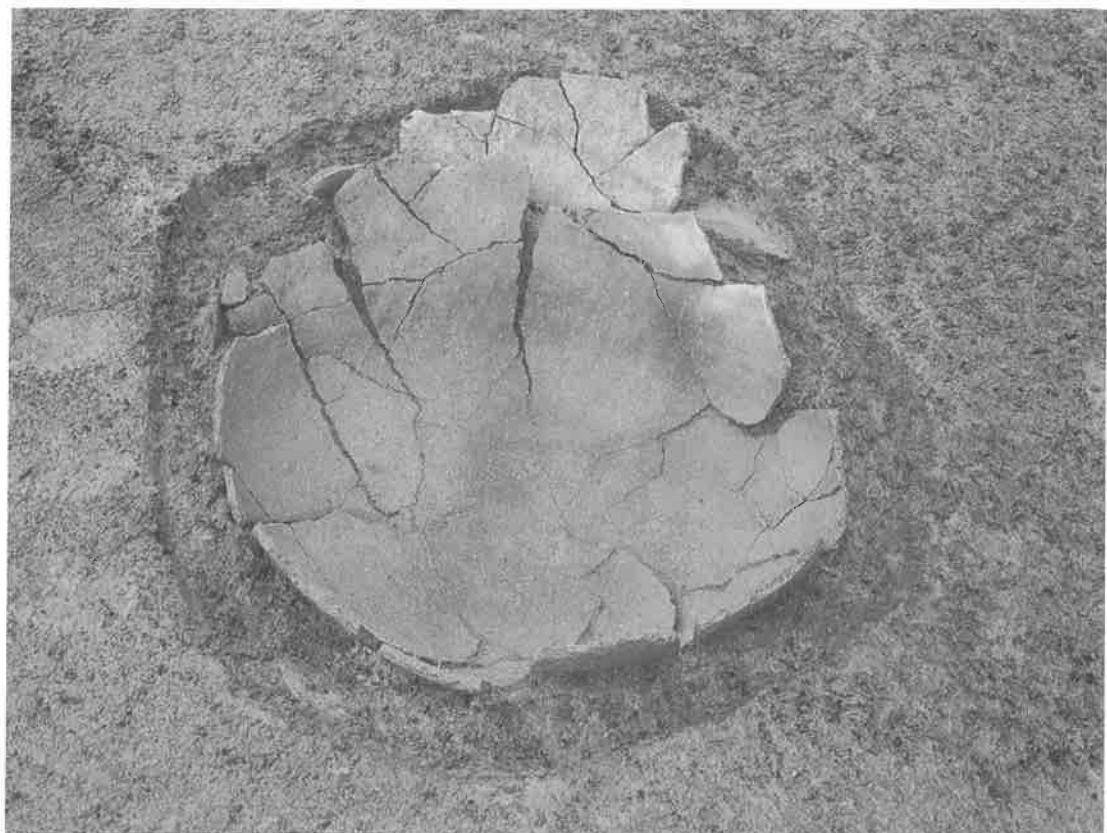


10号甕棺墓（西から）



11号甕棺墓（西から）

図版11



12号甕棺墓（西から）

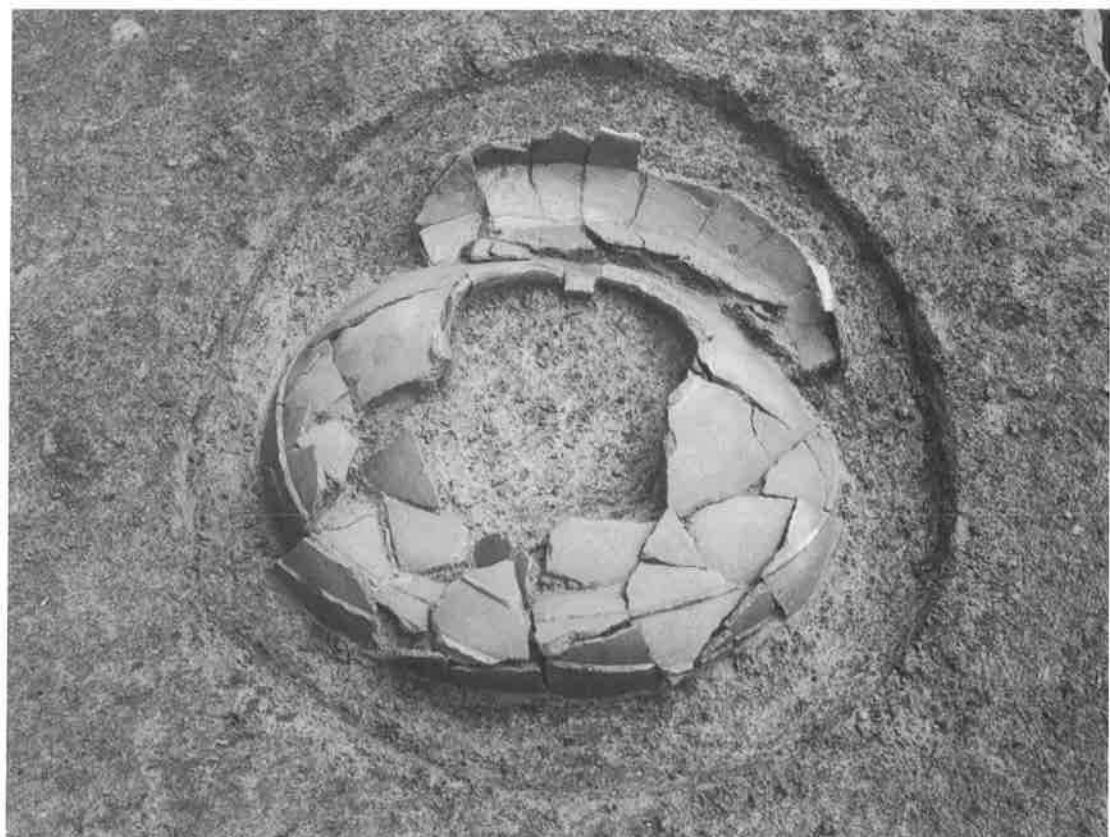


13号甕棺墓（北西から）

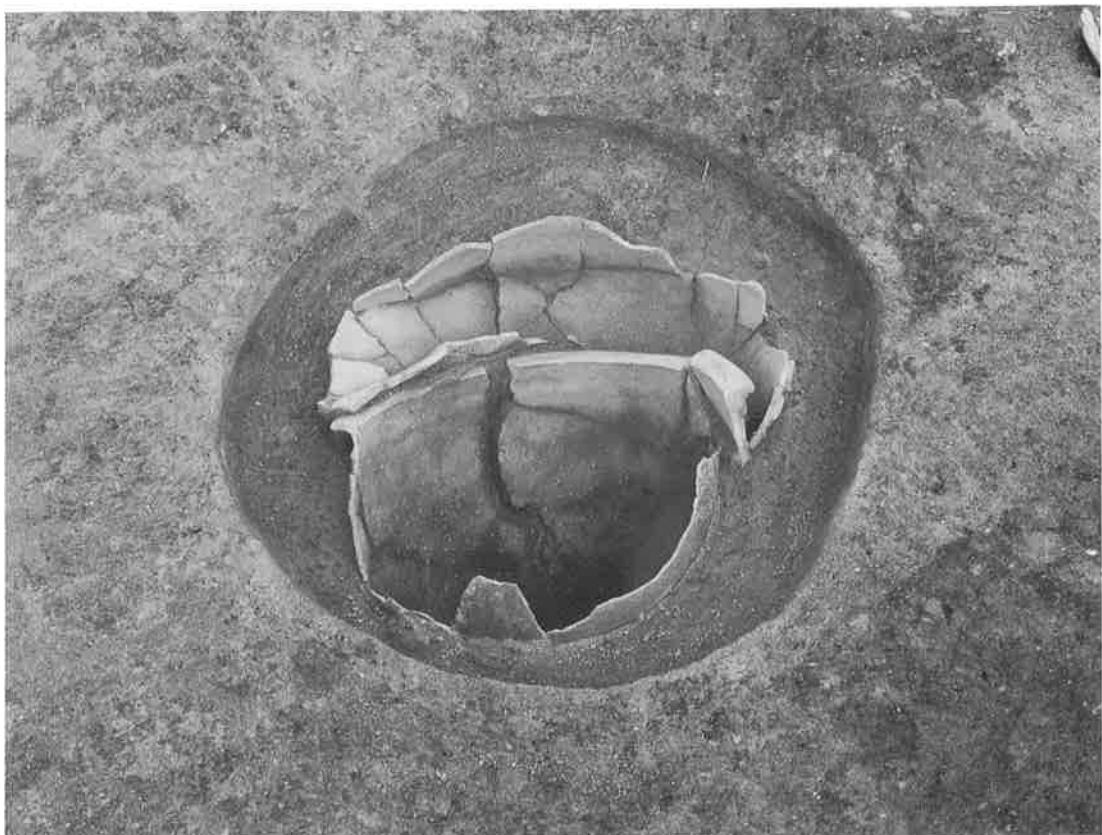
図版12



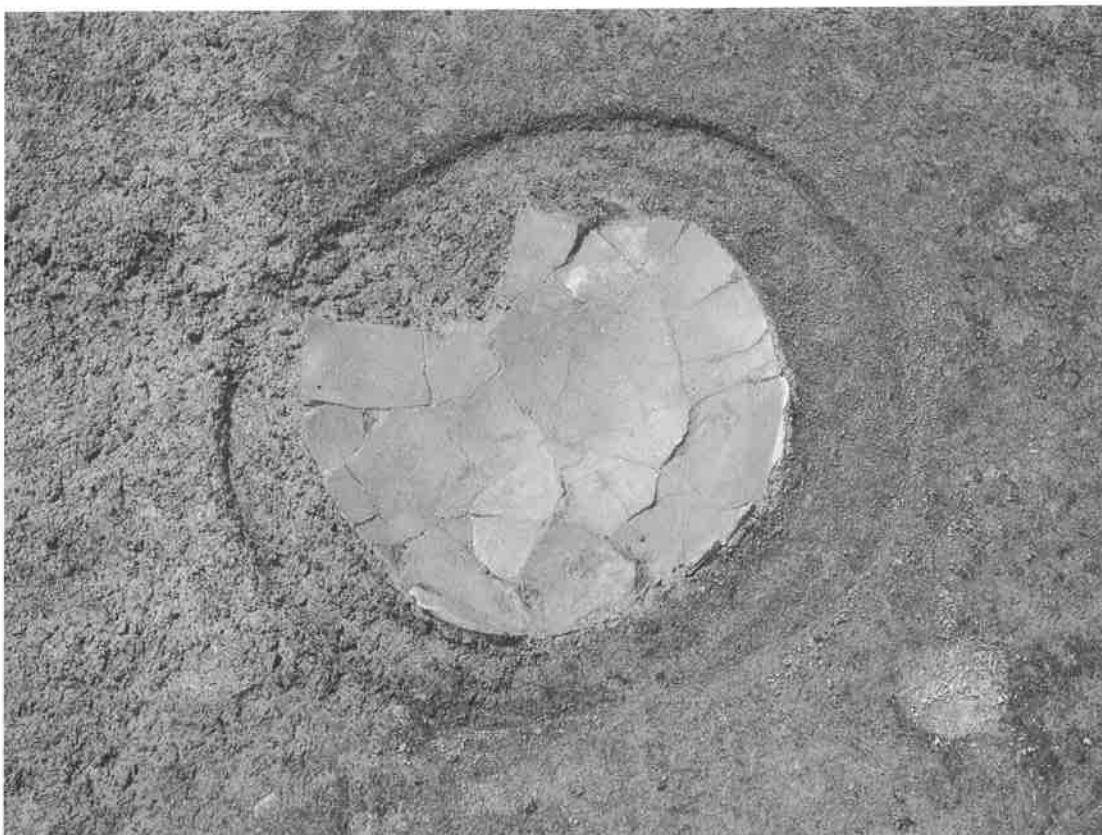
14号壺棺墓（西から）



15号壺棺墓（西から）



16号甕棺墓（北西から）

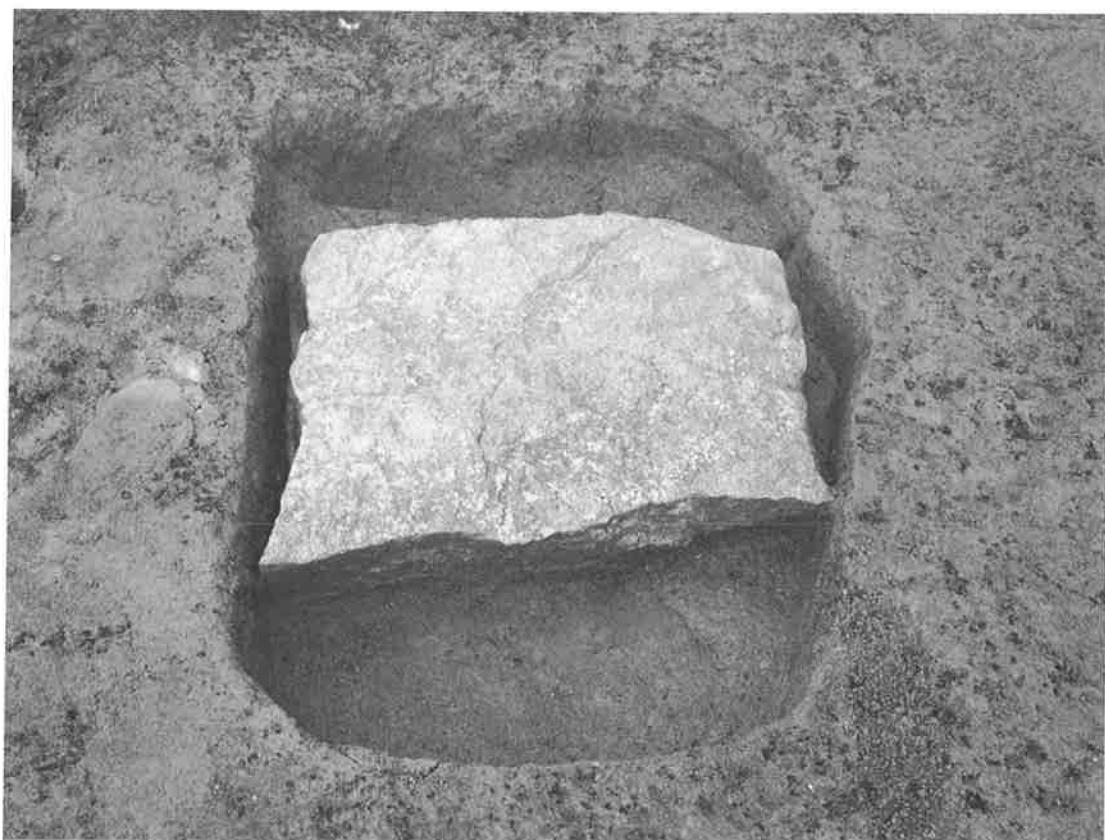


17号甕棺墓（南から）

図版14

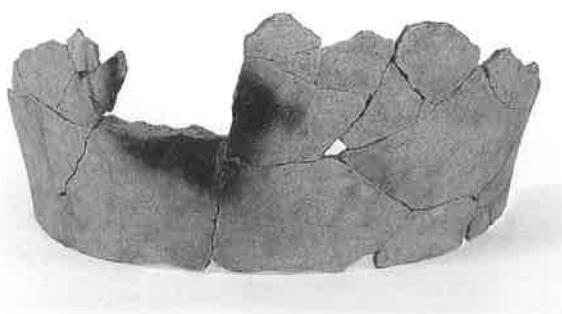


1号竪穴住居跡（東から）

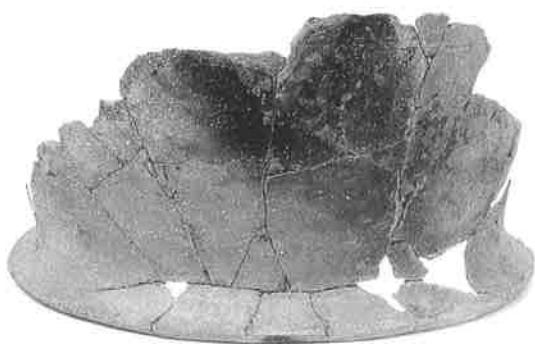


SX-1（西から）

図版15



1号壺棺



3号壺棺



4号壺棺

2号壺棺

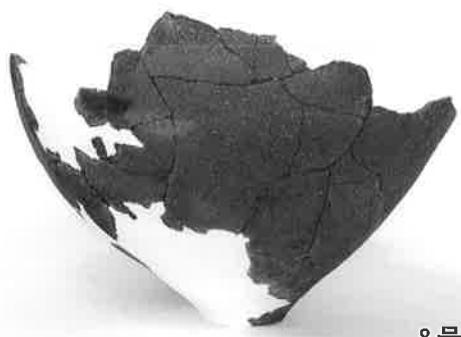
1～4号壺棺

图版16



7号甕棺

5号甕棺

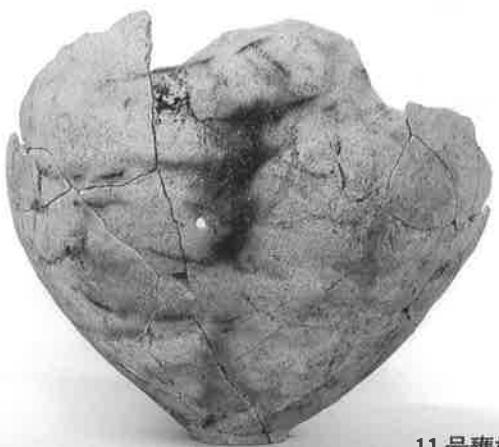
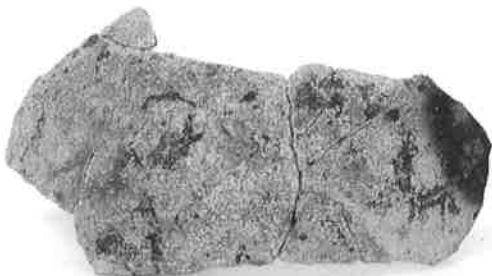


9号甕棺

8号甕棺

5~9号甕棺

図版17



11号甕棺



10号甕棺



13号甕棺



12号甕棺

10~13号甕棺

図版18



14号壺棺



16号壺棺



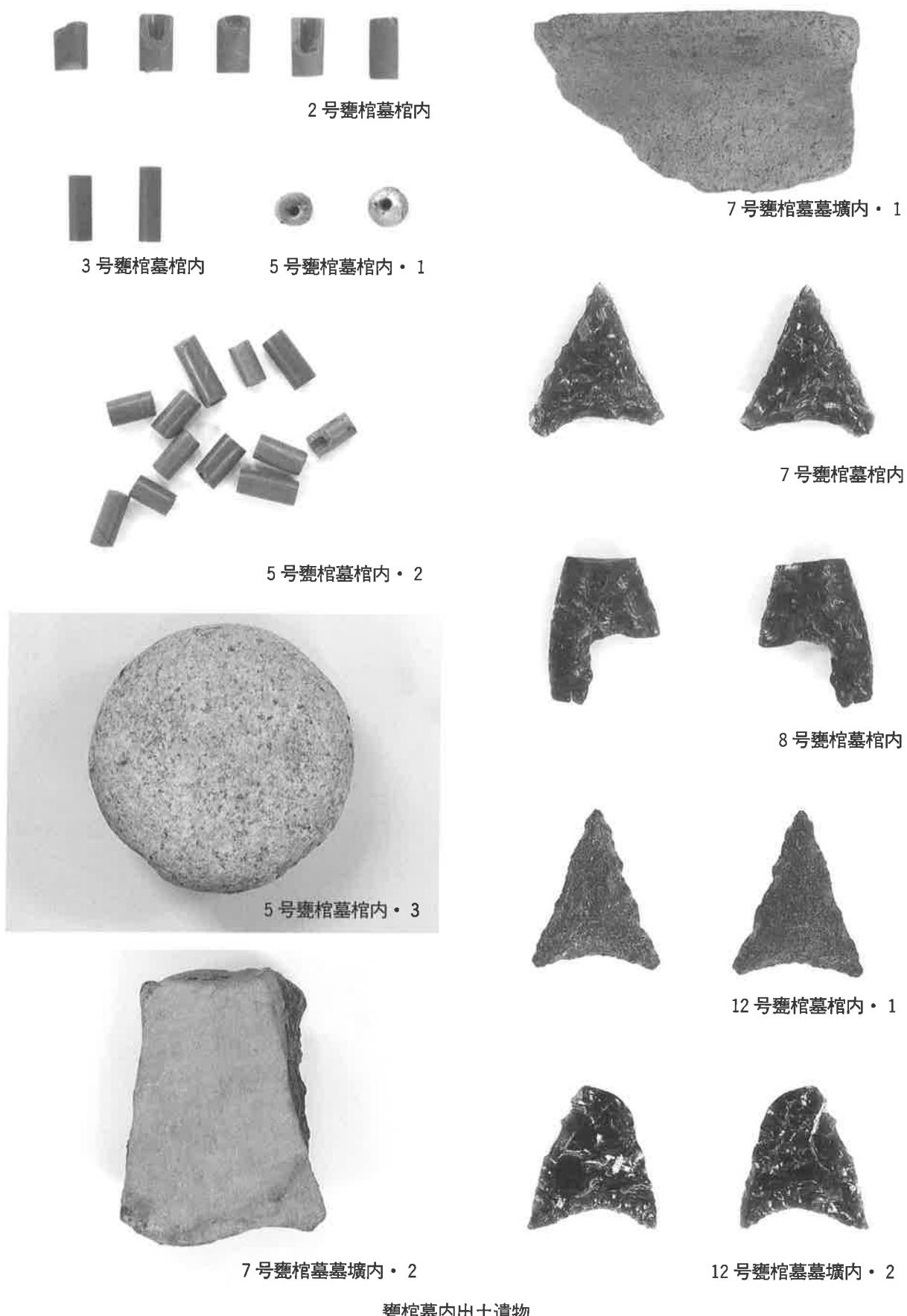
15号壺棺



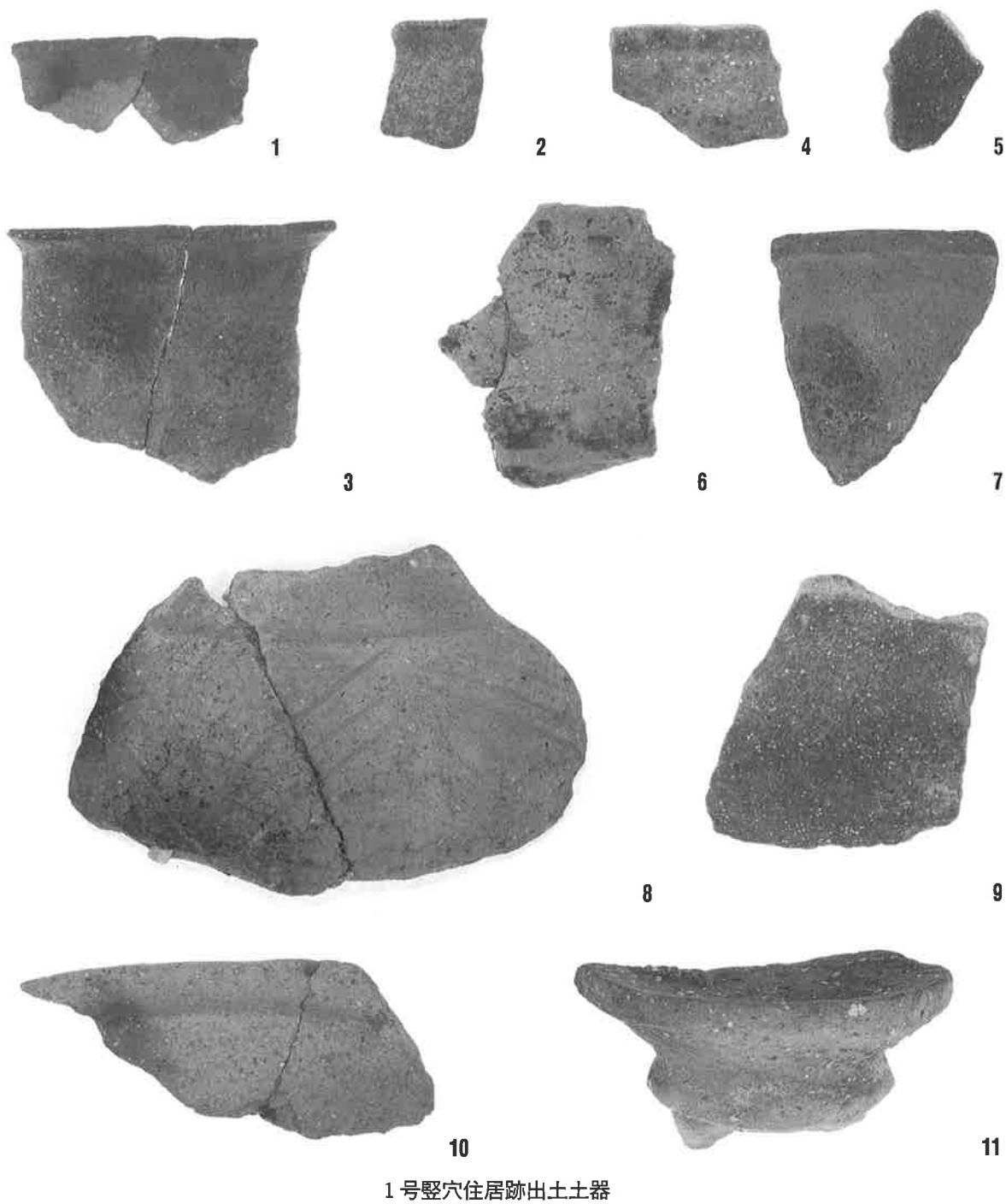
17号壺棺

14~17号壺棺

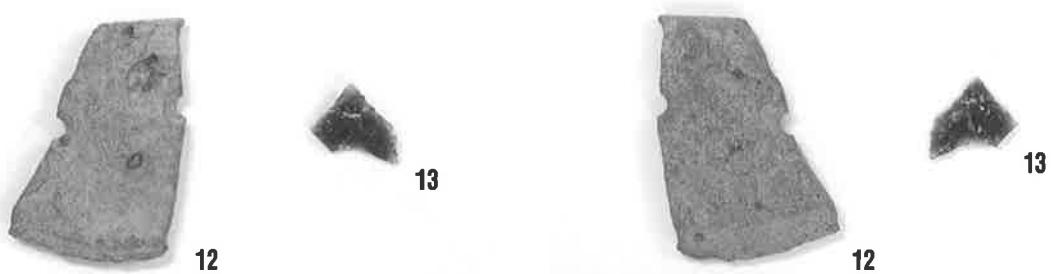
図版19



図版20



1号竖穴住居跡出土土器



1号竖穴住居跡出土石器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひろたいせきよんく 一やよいじだい・かめかんばぐんのちょうさー
書名	広田遺跡IV区 一弥生時代・甕棺墓群の調査ー
副書名	二丈町文化財調査報告書
卷次	第33集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	村上 敦
編集機関	二丈町教育委員会
所在地	福岡県糸島郡二丈町大字深江 1360
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
広田遺跡IV区	福岡県糸島郡二丈町大字吉井字広田	40462	—	33° 29' 36"	130° 04' 55"	20030602 20030930	1,500 m ²	農業関連施設建設
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	甕棺墓群	弥生時代前期 弥生時代中期		甕棺墓		碧玉製管玉 アマゾナイト製小玉		

広田遺跡 IV 区

— 弥生時代・甕棺墓群の調査 —

二丈町文化財調査報告書

第 33 集

平成 17 年 3 月 31 日

発行 二丈町教育委員会

福岡県糸島郡二丈町大字深江 1360 番地

印刷 大同印刷株式会社

佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20



